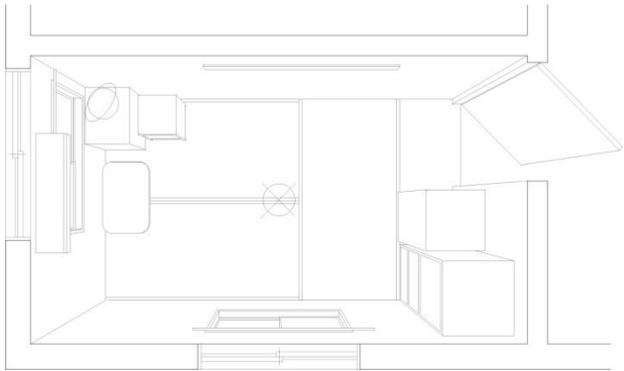


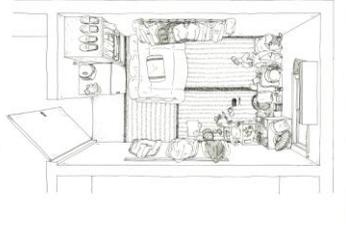
コ
コ
ル
ー
ム
実
験
双
書

1

釜ヶ崎 暮らしと居場所



特定非営利活動法人
ハリエントメントぱんくまの部屋 コローム



コルーム実験双書 1

釜ヶ崎 暮らしと居場所

目次

はじめに 岡本マサヒロ 四頁

釜ヶ崎用語集／釜ヶ崎データ 五頁

第一部 インタビュー 釜ヶ崎 暮らしと居場所 聞き手／構成 岡本マサヒロ

釜ヶ崎 暮らしと居場所 一 (R・Kさん) 一〇頁

釜ヶ崎 暮らしと居場所 二 (M・Hさん) 一四頁

釜ヶ崎 暮らしと居場所 三 (石橋友美さん) 二〇頁

釜ヶ崎 暮らしと居場所 四 (M・Tさん) 二五頁

釜ヶ崎 暮らしと居場所 五 (K・Iさん) 二八頁

コラム 一 コロームという居場所 石川 翠 三三頁

コラム 二 ゆるやかにつながるコレクティブ・タウン ..

「孤族」社会への提言 ありむら 潜 三四頁

コラム 三 共生システムとしての城崎温泉 ..

釜ヶ崎の街づくりを構想するためのひとつの視点 岡本マサヒロ 三五頁

第二部 論考 釜ヶ崎 暮らしと居場所

論考 一 社会に参加すること、まちに生きること 上田假奈代 三八頁

論考 二 コレクティブタウン釜ヶ崎 ..

「縁をつむぎ」居場所」でつながるまちづくり 寺川政司 四二頁

そして、日々はつづく 上田假奈代 四七頁

事業一覧

事業一覧

財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団「住まいとコミュニティづくり活動助成」による活動

日程	活動	参加人数(内訳)	備考
2010/4/27	山王ミニ夜回り	8名	
2010/5/25	山王ミニ夜回り	6名	
2010/6/11	こどもの里WS(ちんどん練習)	17名(子ども14名、ボランティア3名)	講師:赤井浩、小沼亮子
2010/6/28	山王ミニ夜回り	6名	
2010/6/29	おはなカフェ	85名(来場者80名、ボランティア5名)	
2010/7/27	おはなカフェ	47名(来場者45名、ボランティア2名)	
2010/7/28	山王子どもセンターWS(ちんどん練習)	17名(子ども12名、ボランティア4名、父兄1名)	講師:赤井浩、小沼亮子
2010/7/28	山王ミニ夜回	8名	
2010/8/12	ちんどん練り歩き	31名(子ども31名)	
2010/8/22	山王ミニ夜回り	28名	
2010/9/6	おはなカフェ	47名(来場者45名、ボランティア2名)	
2010/9/21	おはなカフェ	49名(来場者45名、ボランティア4名)	紙芝居劇団すずび公演、ボランティア散髪
2010/9/24	山王子どもセンターWS	5名	講師:原口剛
2010/9/30	こどもの里WS	14名	講師:原口剛
2010/10/8	山王子どもセンターWS	10名	講師:原口剛
2010/10/23	まちあるき勉強会	3名	講師:平川隆啓
2010/11/6	まちあるき勉強会	12名	講師:平川隆啓
2010/11/26	山王ミニ夜回り	7名	
2010/12/28	山王ミニ夜回り	8名	
2010/12/29	勉強会+おはなカフェ	39名(来場者35名、ボランティア4名)	講師:平川隆啓
2011/1/25	山王ミニ夜回り	8名	
2011/2/24	山王ミニ夜回り	3名	

ヨルムという実験

私たちが生きるこの世界は実にいろいろなものから成りたっている。それぞれがお互いにつながりをもちながらこの世界をつくりあげている。他者とのつながりに気づき、呼応したときに、私たちは何かしらの「表現」を試みようとする。その瞬間にアートは生まれる。

「表現」とおした自立・自律を育むための活動、「表現」を介して他者とのつながりの回路や接続点を認めあい、社会や地域の問題解決のきっかけとなる活動を私たちは日々試行している。けれど、アートの本質として、未来「漕ぎだす運動」としてのアクションは、必ずしも解決そのものを目的としているわけではない。そこで繰り返しられる関係性の豊かさやダイナミズム、そして問いとして繰り返かえされる日常の営みを大切にしたいと私たちは考えている。アートとは「生きる術」でもある。

新世界フスティバルゲートにおいて市民交流窓口となるヨルムを五年間運営した後、二〇〇七年末、大阪市西成区にある通称・釜ヶ崎に本拠を移した。そして、二〇〇八年一月に「インフォショップ・カフェ ヨルム」を開設し、二〇〇九年六月に「カマン・メディアセンター」を立ち上げた。ヨルムは、困難や孤独な状況にある人びとにむけて積極的にアウトリーチ活動をすすめるとともに、自らが「表現」する機会を創出し、分野を超えて意見交換できる場をつくらうとするひとつの運動である。私たちは、ホームレス、障がい者、派遣切りの若者、ニート、何らかの問題を抱える人、生活保護受給者など、さまざまな人たちと関わりながら、「新しい公共」のありかたをさぐっている。

社会が急激に変化する過渡期ともいえる現在、私たちは「アートと社会」というテーマを深めている途上であり、ヨルムはいまその実験のさなかにある。こうした問題意識のもと、ヨルム実験双書を刊行する。

二〇一一年三月八日

執筆者 (50 音順)

ありむら 潜 釜ヶ崎のまち再生フォーラム事務局長、漫画家
石川 翠 大阪府立大学人間社会学部人間科学科、社会学
上田假奈代 特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋代表、詩人
岡本マサヒロ 特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋、人類学
寺川政司 CASE まちづくり研究所代表、都市計画

作図・イラスト

金 沙智 大阪市立大学大学院工学研究科前期博士課程、建築計画学

助成 財団法人 ハウジングアンドコミュニティ財団

ココルーム実験双書 1

釜ヶ崎 暮らしと居場所

2011年3月21日 第1刷発行

編著者 上田假奈代、岡本マサヒロ

発行所 特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋 (ココルーム)

557-0001 大阪市西成区山王1丁目15-11

電話 06 (6636) 1612

info@cocoroom.org <http://www.cocoroom.org/>

印刷・製本 大淀オフタイプ企業組合

© cocoroom 2011 printed in Japan

ココルームでは寄付を募っています。

郵便振替 記号 01090-5-48059 ココルーム / 三井住友銀行 天王寺駅前支店 普通 1585265

特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋

はじめに

地図にない街、釜ヶ崎。日本最大の日雇い労働者の街、あるいは日本最大のドヤ街などとして知られたこの釜ヶ崎の街は、大阪市西成区の北西部に位置する。推定面積〇・六二平方キロのこの街に、およそ三万人の人びとが暮らしている。そのうちの八割以上は男性だ。日雇い労働に就くために全国各地から集まってきた男性ら、そして現在では生活保護を供給する者も増加している。

西成郡今宮村の小字名として、釜ヶ崎という地名は明治期まで存在したが、行政区画の変更にもない消滅した。釜ヶ崎とほぼ同じエリアを指す地名として、行政的に新しくつくられた言葉ではあるが、愛隣（あいりん）地区という名称も存在する。しかし、この街に暮らす人びとの多くは、この街を愛着の気持ちをかこめて、「釜ヶ崎」、あるいは略して「釜」と呼ぶ。私はこの街を歩くのが好きだ。理由はきわめて単純である。この街には人がたくさんいるからだ。

朝早くからいつぱいの男たちが歩いている。今でも寄せ場としての機能をもつセンターのまわりでは、労働者風の男たちが数多くたむろしている。道端で車座になってワンカップを飲んでいる男たちも、段ボールかなにかを集めているのだ

ろうか、ゆつくりとリアカーを引きながら歩いていく年若い男の姿も見える。

南海電鉄の高架線下の道路沿いでは、露天商が中古CDやビデオテープ、古本、いろいろな種類の小物や電化製品、大工道具などを並べて小商いをしている。東南アジアかどこかのオープンマーケットを彷彿させる光景だ。

少し足をのばして三角公園まで歩いてみる。バラック状の小屋が立ち並ぶ公園の一角では、焚火を囲んで人びとが暖をとっている。女性もちらほら見える。ある人は犬や猫に餌を与えている。どこかで拾ってきた銅線をそろえて束にする男性、焚火にくべる材木を運ぶ姿も見える。片手に豆粒のをせ、飛んでくる鳩を手のひらにとまらせる奇術師まがいの芸当を披露する男性もいたりする。

三角公園から少し行くと、アーケードのある昔ながらの商店街が続いている。家族経営の小さな飲食店や商店が軒を連ね、歩くだけでも楽しい。ちよつと脇道にはいると、大衆演劇の劇場がある。色とりどりの幟がたち、観客で賑わっている。また違う小径にはいると、三味線のために屠られた猫を供養した猫塚にたどりつく。細い路地をめぐり、時間がたつのをしばし忘れる。この街はいろんな顔をもっている。

釜ヶ崎のこと、そしてこの街に暮らす人びとのもつと知りたいという気持ちをひとつの動機として、この冊子づくりは計画された。私がこの街で暮らしていこうと決意を固めてから、数カ月が過ぎようとしていた頃である。

この街には、「他人の過去は聞かない」という独特の不文律がある。故郷や家族、あるいはこれまでの人間関係とのつながりを断ち切ってこの街に来た人びとにとって、個人の過去を語ることは容易ではない。そうしたなか貴重な話を語ってくださったみなさまに心より感謝したい。ありがとうございしました。そして、論考、コラムを執筆してくださったみなさまにも感謝の気持ちを伝えたい。

この小冊子を読んでこの街に関心をもってくれたみなさまには、ぜひこの街を実際に訪ねてほしい。そして歩いてほしい。自分の目で見、自分の耳で聞き、この街の空気を全身をとおして感じていただけたらうれしく思う。

本冊子は、財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団による「住まいとコミュニティづくり活動助成」を受けて作成が可能となったことを付記しておく。

(岡本マサヒロ)

釜ヶ崎用語集

【寄せ場】日雇い労働の求人業者と求職者が集まる場所のこと。東京の山谷、横浜の寿町、大阪の釜ヶ崎は三大寄せ場と呼ばれる。

【ドヤ】簡易宿所のこと。「ヤド」をひっくりかえして「ドヤ」と呼ぶようになったと言われている。多くは素泊まりであり、前払いを原則とする。釜ヶ崎では最低料金一泊五〇〇円からある。外国語ホームページをつくり外国人旅行者の利用が増加したドヤもある。

【ドヤ街】簡易宿所が立ち並ぶ街のこと。寄せ場が拡大・集約化するにつれ労働者のためのドヤや飲食店ができ、その結果、いわゆる「日雇労働者の街」が形成される。

【日雇い】働き方の形態のひとつ。その日ごとの契約、もしくは三〇日以内の期間を限定した雇用の仕方のことを言う。短期的な雇用と解雇を繰り返し、景気の影響を受けやすいため不安定な就労となりやすい。釜ヶ崎における日雇い労働の職種としては、建設業が九〇パーセント以上をしめ、残りが製造業、運輸業などである。

【現金】一日のみの日払いの仕事のこと。不況の影響で現金仕事は少なくなっている。

【契約】一週間、二週間などの一定期間、飯場に泊まりながらする仕事のこと。

【手配師】寄せ場や街頭で現金仕事や飯場の斡旋、手配などをする人のこと。

【飯場】一定期間の契約雇用の労働者が寝泊まりする宿舍のこと。通常は仕事の有無に関わらず給料から労働者の宿泊費・生活費などが天引きされる。

【ケタ落ち】日雇い労働において、賃金が低いなど条件が

悪い職場や飯場のこと。

【野宿者】路上や公園で起居する人びとのこと。野宿者のことをホームレス、野宿することをアオカン（青空簡易宿泊所の略）とも呼ぶ。日雇労働は不安定な働き方であるため野宿者となる可能性も高くなる。野宿者の疾病・自殺死亡率は一般の人と比べてきわめて高いとみられる。行政の世話になりたくないなどと、生活保護の受給を拒み、野宿者であり続ける人もなかにはいる。

【生活保護】通称「福祉」。憲法第三十五条に規定する理念（生存権、国の生存権保障義務）に基づき、生活に困窮する国民に対し、必要な保護をおこない、その最低限度の生活を保障する公的制度。大阪市では単身者の場合、およそ十二万円（生活扶助として約八万円、住宅扶助四万二〇〇〇円）が、毎月末に支給される。近年では、被生活保護者を利用して利益をあげる貧困ビジネスが問題とされることが多い。

【福祉マンション】簡易宿所（ドヤ）を改装して共同住宅とし、高齢労働者などの住居を確保することで生活保護の受給を可能としたもの。専門のスタッフやボランティアを配置して入居者の相談などの支援などを行うところもある。

【シェルター】臨時夜間緊急避難所のこと。釜ヶ崎には、三角公園南側にある今宮シェルター（定員六〇〇人）と萩之茶屋一丁目の萩之茶屋シェルター（定員四四〇人）の二ヶ所がある。利用は一日単位で、夕方五時三〇分に利用券が配布され、夕方六時から翌朝五時まで無料で宿泊できる。

【炊き出し】生活困窮者に対して、雑炊や丼もの、カレーライスなどの食事をふるまうこと。釜ヶ崎では、四角公園（毎日の昼と夕）、三角公園（毎週火曜日と土曜日の昼）などでおこなわれている。

【夜回り】夜間に路上で寝ている野宿者を訪ね、安否確認などの声かけをする活動。おにぎりや毛布、印刷物などを配布することもある。釜ヶ崎では、複数の団体が夜回りを定期的におこなっている。

【特掃（トクソウ）】正式名称は高齢者特別清掃事業。五五歳以上の高齢者対策の就労事業。大阪府と大阪市の委託を受けNPO釜ヶ崎が実施している。地区内の生活道路やセンター内の清掃、草刈り、センターのガードマンなどの仕事があり、一二〇〇人ほどが登録している。輪番制で数日に一度の割合で仕事がまわってくる。日当は五七〇〇円。

【夏まつり】正式名称は釜ヶ崎夏まつり。毎年八月二三日から一五日にかけて三角公園で開催されている。一九七二年から継続している。公園の中央に櫓が組まれ、盆踊りや音楽ライブ、のど自慢、炊き出しなどがおこなわれる。また一年間のうちに釜ヶ崎で亡くなった人の追悼もおこなう。

【越冬闘争】正式名称は釜ヶ崎越冬闘争。日雇労働者、野宿者を支援することを目的として、一月二八日から一月七日にかけての年末年始におこなわれる取り組み。一九七〇年の暮れから継続している。人民パトロール、医療パトロール（夜回り）、炊き出し、野宿者の寝場所確保のための布団敷

きなどのほか、越冬まつりとして三角公園での音楽ライブ、映画上映、書き初め大会などがおこなわれる。

【三角公園】正式名称は萩之茶屋南公園。萩之茶屋三丁目にある公園で、三角形のかたちをしていることから三角公園と呼ばれる。夏まつり、越冬まつり、炊き出しなどの会場としても用いられる。

【あいりん総合センター】略称はセンター。南海新今宮駅の南側、萩之茶屋二丁目にある。あいりん職業安定所、西成労働福祉センター、大阪社会医療センター付属病院がはいっている。大阪府の日雇労働対策として西成労働福祉センターが一九六二年に設立、一九七〇年に総合センターとして現在の場所にできた。一階と二階には広いスペースが設けられ、朝から夕方まで雨風をしのぐことができる。

【大阪市立更生相談所】略称は市更相（シコウソウ）。西成区太子一丁目にある福祉施設。大阪市が運営する旧大阪市立愛隣会館と旧大阪市立中央更生相談所を統合して、一九七一年に発足。一階には、日雇労働者のための「あいりん銀行」が置かれている。

【あいりん銀行】正式名称はあいりん貯蓄組合。大阪市立更生相談所一階にある。開設は一九六二年。日雇労働者の手持ち現金を預かることで、路上強盗で奪われることや、飲酒や賭博に使い果たしてしまうことを防いできた。大阪市の委託を受けた民間団体が運営する。

【西成市民館】社会福祉法人石井記念愛染園が運営する公

民館。萩之茶屋二丁目にある。カラオケや卓球、将棋、卓球などのレクリエーションのほか、喫茶の運営、法律相談、健康相談などもおこなう。

【NPO】釜ヶ崎では「NPO」と言った場合、NPO釜ヶ崎（特定非営利活動法人釜ヶ崎支援機構）を指すことが多い。NPO釜ヶ崎は、野宿者などの生活自立支援を目的として、一九九九年に設立された。特掃をはじめとする就労支援やシェルター（臨時宿泊所）の運営管理などもおこなう。

【こどもの里】カトリック大阪大司教区が運営する児童館。萩之茶屋二丁目にある。学童保育として設立されたが、現在では子どもの緊急避難や一時宿泊の機能ももつ。冬期のあいだ子ども夜回りも実施している。

【山王こどもセンター】西成区山王二丁目にある児童館。一九六四年にドイツ人宣教師のストロームが西成区の自宅子どもを預かったことをきっかけとし、一九六七年に「家庭保育の家」として発足した。一九八三年に山王こどもセンターに改称され現在に至る。

【ふるさとの家】一九七七年に社会福祉法人聖フランシスコ会によって、高齢の日雇労働者支援を目的としてできた。西成区萩之茶屋三丁目にある。野宿者や日雇労働者が憩うための談話室、鍋やガスコンロを自由に使用できる自炊室などがある。また納骨堂も設けられている。

【コクルーム】特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋の略称であり、同法人が運営するインフォショップ・

釜ヶ崎データ

カフェの名称でもある。飛田本通り商店街（動物園前一番街）に位置する。商店街の通りをはさんでカフェの向かいには同法人のカマン！メディアセンターがある。

【紙芝居劇むすび】西成区太子二丁目に事務所をもつ紙芝居劇集団。現在のメンバーの平均年齢は七六歳。従来の紙芝居と違い、複数の演者がそれぞれの役回りをもち演じる。紙芝居の絵はすべて手づくり。学校、福祉施設などでの出張公演のほか、二〇〇七年にはロンドンでの公演も果たした。

【てんのじ村】現在の西成区山王界限（旧東成郡天王寺村）を指す名称。芸能のメッカであった新世界や千日前、道頓堀に近いことから芸人が多く住み、全盛期には、ミヤコ蝶々や人生幸朗など三〇〇人以上が暮らしていた。現在でも下町風の街並みが残る。一九七七年に「上方演芸発祥之地てんのじ村」と刻まれた記念碑が建てられた。

【オーエス劇場】西成区山王二丁目にある大衆演劇の劇場。入場料二三〇〇円（大人）。一九五四年に浪曲劇場として開館し映画館だった時期もある。

【ジャンジャン横丁】新世界から釜ヶ崎に通ずる商店街。多くの飲食店が立ち並び、かつては新世界と旧飛田遊郭とを結ぶ道筋として賑わった。

【鶴見橋商店街】西成区花園から西へ約一キロメートル続く商店街。大阪では天神橋筋商店街に次いで二番目に長い商店街である。

面積 〇・六二平方キロ

人口 二万九二二四人（男性 二万四〇九九人、女性 五〇二三五）

世帯数 二万五〇七四世帯

人口にしめる男性の割合 八二・七%

人口密度 四万六九七四人／平方キロ（大阪府は二万一九二〇人／平方キロ）

高齢化率 二九・九%（全国平均は二〇・一%）

平均寿命（男性）西成区 七三・一歳（全国市区町村最下位）

簡易宿所の数 七六軒

日払いアパートの数 二四軒

簡易宿所転用型福祉マンションの数 九七軒

シエルター利用者 四四四人（一日あたり、定員一〇四〇人）

野宿者（一日あたり推定） 六〇〇人

地域労働者数（推定） 九〇〇〇～一〇〇〇〇人

現金求人数（二〇〇九年九月、一日あたり） 一三三七人

白手帳（日雇用用保健手帳）所持者 二〇二五人

高齢者特別清掃事業登録者 二二三六人

生活保護受給者（二〇一〇年七月） 九四五五人

第一部 インタビュー

釜ヶ崎 暮らしと居場所

聞き手／構成

岡本マサヒロ

釜ヶ崎 暮らしと居場所 一

話し手 R・Kさん

九州の炭鉱町で生まれ育ったR・Kさん（五八歳、男性）は、小学生のときに家族とともに大阪に引越してきた。それ以来ずっと大阪に住んでいる。写真が趣味で、カメラを四台持っている。撮影した写真は、ポストカードやカレンダーにしたりして、行きつけの飲食店で知り合った人に配布している。

これまで日雇い仕事の現場で働いてきたR・Kさん。数年前より仕事の数が少なくなってきたなか、生活保護が受けられ、マンションにもすぐにはいれるという話にとびつき、大阪市西成区内のあるマンションに入居することになった。そのマンションは、家賃の割には住環境が良好ではないため、R・Kさんは新しいマンションに引越すことを決意した。かつて住んでいたマンションの外観を見に連れて行ってもらったあと、R・Kさんから話をうかがった。

さつき見に行ったマンションに入居するきつかけな

んだけど、センターで仕事探してたんだよね。そしてたある男性から「福祉」もらえる不動産屋さんがあるから」って言われて。それまではドヤにいたんだけど、仕事がなかったからね。仮に仕事があったとしても、一〇日契約とかで行ったって、結局半分くらいしか仕事なかったら赤字になりますやん。そういうこと考えたら、一時的かどうかは知らんけど、とりあえず福祉受けれるもんなら受けてみようかなど。

それで二週間で福祉ももらえるようになりましたね。一二万なんぼももらえるようになったんやけど、家賃と光熱費あわせたら四万八〇〇〇円でしたね。だから残るのは七万円くらいですね。四万八〇〇〇円という額は、福祉マンションと比べたらそんなに高くはないけど、この界限の一般的なマンションやアパートと比べたら高いですね。内容的には三万でも高いと思いますね。三畳ひと間やからね、二万五〇〇〇円くらいでもいい。そのかわり敷金とか礼金とかいらんかったからね。一応古いけどテレビもついてますやろ。小さな冷蔵庫やエアコンなんかもついてますね。あと小さなちゃぶ台が置いてあったな。あれは前の人が置いていったんやろね。

布団は自分で買いましたね。福祉のお金がおりるのが二週間後でしょ。その前の布団は貸してくれると思っただけ違うんですよ。家賃払うときにね、その

布団代で五〇〇円引かれるんですよ。ほんとうは福祉受けるときに市とかから布団代はもらえるもんだよね。結局、福祉から布団代もらって買ったんだよ。だからダブルになった。借りてるやつと、ほんで福祉からお金もらって買ったやつと。

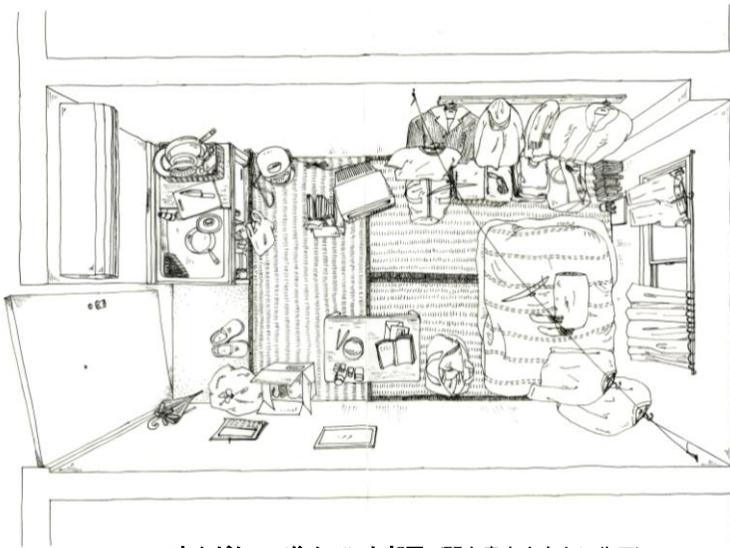
あと、家賃がね、一日でも支払いが遅れるとね、「荷物放り出します」って書いてありましたわ。おかしいでしょ、一日だけ遅れたからって荷物放り出すなんて。それに問題は風呂やね。あのマンション十一階建てでしょ。何人が入居してるかって数えないとわからないけど、一〇〇人くらいいてもおかしくないよね。なのに一ヶ所しか風呂がないんだね。風呂桶っていうのは、三人か四人しか入れない。で、からだを洗うところが一、二、三・・・六つかな、シャワーね。風呂はいれる時間は四時半から七時やけど、だいたい七時前にはもう出なあかんでしょ。だから実質二時間くらいしかはいられへん。で、刺青した人もおるし。鏡に映るでしょ、こうね。鏡見てたら背中が映るでしょ、恐いですよ。だから風呂はいるのは二日にいっぺんくらい。そんなに風呂も好きじゃないけどね、そういうので余計嫌やったよ、それに狭いし汚い。もう何人もはいってるからあとからはいったら風呂なんかもう汚いでしょ。

調理できるスペースも一階にしかないんですよ。ガスコンロと電子レンジね。どっちも無料なんやけど、

わざわざ上の階から下に降りてって大変でしょ。で、温めもんしたって上にあがるまでのあいだに冷めてるでしょ。せやからそこを使う人たちあんまりない。部屋には、電気ポットはありましたね。でも炊飯器の場合は、もしかしたら電気落ちるかもしれんから、ほとんど使わなかった。食事は、ほとんど出来合いのもんやったね。スーパー玉出で買ってきたりね。

*

さつき行つたあそこのマンションね、前はドヤやっただんですね。だから壁が薄いんですよ。である時、虫がおつたんですよ。ちよつと夜遅い時間だったけど虫がおつたから、虫を殺したんですよ。その音が隣に響いて。隣の人が壁を叩いたって言わはって、わしのとこに文句言つてきてドアをバンバンバン叩いて、おれ殺されるんかなって思ったんですよ。ほんとそれほんとやで。で、その何日前にね、新聞で読んだんですよ。そういう住民どうしのトラブルでね、近所でひとり殺されたんですよ。ボールでね、いきなり滅多打ちに。そやから同じ条件なんですよ。ぼくの立場とね。バンバン、ドア叩かれて。怖いね。やからこれもしかしたらドア開けとつたらやられるかわからへん。マンションやドヤでの近所づきあいって難しいよね。



R・Kさんがかつて住んでいた部屋（聞き書きをもとに復元）

挨拶はほとんどしないしね。だから、友だちとかも、まあまったくゆうことはないけど、ほとんどできない。福祉もらうようになって、ほとんど仕事はしないでしょ。写真撮るのが楽しみでしたね。ストレス解消になりませぬ。二ヶ月に一回か、三ヶ月に一回だけ、写真撮りに出かけてましたね。夏はPLの花火。あ、その前に梅、梅が咲くのね一月ね。あ、三月か。二月か三月くらいに梅咲くでしょ。で、梅も写しにいつて。あ、そのあと桜。桜も写しましたね。まあさつきも言ったように夏は花火。秋はコスモス。だいたい季節ごとに行ってますね。

ぼくの写したカメラは古いカメラ、昔買ったカメラです。あの小さな黒いカメラあるでしょ。あれはもう福祉もらう前から持ってた。写真というのはキリがない、あの、ここまでというキリがないですよ。だから満足すること、「ここまで撮ったから、今日キレイに撮れたから」ってそれで満足じゃないから、うん、終わりがありませんよ。だから楽しい。

部屋ではほとんどの時間テレビ見るか、安い喫茶店行って本読んでましたね。本読むときは、天下茶屋のミスタードーナツ。あそこやったらモーニングで三〇〇円でしょ。コーヒー何杯でも飲めるし、ながくいられる。で、ちよつとあきたら、すぐそばに天牛っていう本屋さんあるでしょ。それとね、この辺の喫

茶店やったらね。そこ、まっすぐいったらバロンって
いう喫茶店あるんだけど、それを左に曲がったとこ、
ずつと阿倍野の方へ行く道の左側には「その」ゆう喫
茶店があります。そこがね、モーニングが三三〇円。
けつこうバラエティに富んでね。トースト、玉子と
野菜のサラダ。小さいけどね。そこでよく新聞を読ん
でましたね。

で、そのほかにね、あの、あれ。食べ物屋さんね。
お寿司屋さん行くんですよ。ちよつと豪勢にみえるで
しよ。そこ佐兵衛寿司ゆうとこ、ジャンジャン横丁の
ね、南側の角つこにね、佐兵衛寿司ってあるんですよ。
そこはね、ずーつと前からね、行ってるんですよ。そ
こへ行くとね、会話できるでしょ。「まぐる頂戴」言う
たら「あい！まぐる一丁！」ってお兄さんが言って、
そこでまた会話が生まれるでしょ。で、そこでストレ
ス発散できて、そこでこう、冗談も言えるしね。世間
話もできるし。そのの店員さん男前やしね、性格もい
いんですよ。

会話っていうのは、人との付き合いゆうのは生きる
うえでの、その、なんていうかな。その、生きること
そのものでしよ、会話ゆうのは。人との会話がなくな
ることによって人間孤独になつていって、自殺につな
がつていく可能性もある。喫茶店では、まあそのマ
スターとは喋りますけどね。喫茶店ではそんなに友達

はできないです。あのお寿司屋さんではね、結構ね、
そのお寿司屋さんではお客さんもいいんですよ。お
客さんどうしてこう喋ったりね。で、ぼくの写真を店
に飾ってもらってね。

だけどマンションでは、まあほとんど挨拶しないで
すね。なんかみんなこう、みんなゆうことはないけど、
ぼくもそう、そうあるんですけど、たぶん他の人もね、
まじめな人に限って福祉をもらってることに対して負
い目を感じてます。だからなんかみんな暗いんですよ。
まじめな人に限ってね。で、そのいま見たところは、
いろんな人がはいつてるんですよ。刑務所からでてき
た人とか、クスリ売ってはる人とか。

こんなこともありましたね。あそのマンションに
いたとき、同じ階の男性が自殺したんですよ。その人
は、ちよつとね、足が悪かったね。足が悪かったらあ
んまり出歩けないでしょ。それ以上のことはちよつと
わからないんやけど。なんか友達と会つとうみたいや
つたけどね。だから時々訪ねてきてました。いや、時々
じゃなくて誰かが毎日ね、特定の知り合いがおつたみ
たい。でもそんなん、喋るような友達ではなかったみ
たいですけどね。

*

結局、ぼくもあのマンションが嫌になってたんで、このあいだの二月一日に鍵返しにいったんですよ。で、そのときに、「これじゃ困る」って言われたんです。「一日遅れてもこんなもん、その、家主に対してね、申し訳したんから」て。月末って約束とかそんななんないんですよ別に。そやけどぼくは月末までに荷物片付けて、一日に鍵返しに行ったんや。その時に文句言われたんですよ。「一日以降の家賃もなんぼか払ってくれ」って言われたんですよ。そのときはもう拒否しましたけどね。一応まあ、そのとき「来い」というか。とりあえず一応それはそれで終わったんです。

ぼくのやつてること別に間違いない。一日までに家賃が払えなかつたら荷物出すって言うてるんやからな。で、そういうこと言うてる割には、一ヶ月前にはね、「言うてもらわないと困る」って。だから紙に書いて貼って言うてあることと、自分らの、向こうの管理人の言うてるとは全然矛盾してる。出たのは十一月三日やけども鍵渡したのは十二月一日。月末には荷物も全部もう出してたんですよ。で、鍵を渡したんです。お金払って、ええと十二月に出たでしょ、だから十一月分のお金払って出た。

いま住んでいるとこの家賃はね、えっと四万二〇〇〇円か。それにプラス水道代が五〇〇〇円。それプラス光熱費。トータルで前のこととほぼ一緒くらいだけ

ど全然広いですね。今の間取りは、風呂とトイレ、小さい台所、それと八畳。それと押入れ。あと洗濯機が置ける小さいベランダ。全然違うでしょ。三倍くらい違いますね。前と比べてね。自炊はいまはまだあまりしてませんよ。冷蔵庫がないからね。で、昼間は部屋暖かいんですよ。日当たりがいいからね。買い置きすると腐ってしまうじゃないですか。だからあんまり自炊はしてないですね。

釜ヶ崎 暮らしと居場所 一

話し手 M・Hさん

昭和一三年生まれのM・Hさん(女性)。結婚して子どもをもうけたが、だいぶ前に離婚した。その後、ほかの男性と知りあい、釜ヶ崎のとある福祉マンションで同居するようになった。しかし最近になって、その男性とも別れ、現在は同じマンションでひとり暮らしをしている。

かつてママさん卓球をしていたM・Hさんは、近所の公民会で卓球をするのが楽しみであった。また毎朝

コーヒーを自分でいれて飲むことを自課としている。病院に通う帰り道に、商店街やスーパーに寄り、買い物するのも楽しみのひとつである。彼女が暮らすマンション二階に設けられた談話室で話をうかがった。

私ほほれ、前二人の時おった部屋やからな、ちよつと広いんや。そやけどな、日あたりが悪いからな、寒い。だから暖房、夜になったらよう点けるけどな。このマンションは、だいたい一人の部屋で三畳くらいやな。で、私とこは三畳とちよつとだけ広いわ。ほんで、お布団置くちやんと押し入れじゃないけど棚があるしな。四月からひとりになつたけど、部屋変わらんとそのままや。荷物あつち持つてつたりこつち持つてつたりかなわんから。ほんで、聞いたねん。「私部屋かわらなあかんの？かわらんやつたらもうよそへいつてもええしー」つて。そしたら「ほな、ええよ。ここにおつてええよー」つて。だから、いまだここにおる。もう引つ越すのしんどいしな、荷物あちこち片づけんとあかんし。それでうてもだいぶん始末したよ。いや、もういろいろ置いとつたやろ。そんなん全部ほかしたわ。

ひとりの時間は、まあ気楽な点もあるけど、もし病気がした時どうしようかなーと思つて、それは心配やな。いまこないして元気に話しててもな、夜中にどかないな

るかわからん、それを頭に置いてるからな。いままでやつたら二人とも倒れることないやん、いつぺんには。だから一人がどないかしてくるつていう頭あつたけど。その点だけがちよつと心配やわ。一回あの人も病気がしたしな。

ほんでもな、一人でおつたらな、ええ時もあるで。やつぱり自分の思つたようにできるし。何でか言うたら、うちこれまではだいたい、縛られてたみたいな感じやつたからな。うん。何時から何時までは食事の時間とか言われたら、私どつこも行かれへんかつたもん。人間は悪い人じゃない。でもこの面がな、ちよつとルーズな点があつたから。ものすごい苦労したもん。一緒にいたあいだは、もうほんまに、いつでも悩み事はつかりやつた。人に言われへんしな。今はな、自分自身がちやんとしたらええと思つてるからな。その点は、まあ楽やねん。女の人つて案外な、ここまでは遊んで使つてええけど、こつからこんだけ使つたら具合悪いなと思つたら、ある程度セーブするやん。男の人はそれできひんやん。

あの人はお酒はたまに飲む程度やつたね。このぐらいのビール一本くらいやつたからな。でもギャンブルがな。だからいつつもな、お金を私に預けとつてもない。「返すから」言うて、いまだに返してもらつた試しがない。ほんまに返してくれへん。うーん、まあええ点

もあつたけどな。あの点だけをちやんとしてくれたら、一緒におれたけどな。もう辛抱できんようになった。苦勞したんよ、うち。その点で苦勞したんよ。お金でね。ほかの面は、あんまり苦勞してないけど、この点で苦勞したから嫌うちゅう思いたもん。男の人は、そういう点、子どもみたいだね。何歳になつても、会うたんびに忠告してんやけど。

*

私、出身は、もともとは大阪やねん。私、養女で田舎に行つてこの日ちゅうとこへ養女へ行つて。だから、もう田舎にも誰もおれへん。育ててくれた父親も死んだし、お母さんはもう小学校六年のときに死んだかな。兄弟はいない。養女に行つてからひとりっこやから。だから、今はもう、田舎ないわ。ほんで、私のほんまの産んでくれた母のほうに姉が二人おつてんけど一人死んだ。私一番末っ子やから養女に行つてんけどな。お姉さんも今ちよつと音信不通やから。

お父さんは、ほんまの父親もおつたんやで。姫路からちよつと離れたとこにおつたんや。前に遊びに行つたけどな。遊びに行つてからはな、私はまあ遊びに行つたらもう洗いもんもせんで、ほんまにお客さんでな、何にもさせてくれへん。父親はな「苦勞してるからせ

んでええ」つて。ほんで、お母さんは、私を産んで死んでるから、後妻がはいってるやん、で、そのお母さんは、私のこと、小さい時のこと知ってるねん。だから、ようしてくれはつたけどな。ほしたらまた、腹違いの、妹が二人おんねん。その子が一回大阪訪ねて来て、一緒に過ごしてな、連れていったつて、ほんでまた姫路まで送つて行つて、それからあとは知らないの。お父さん死んでから。もうお父さんおらんかったら、行つてもしょうがないもん。お父さん、あたし行つたら明石までな、牡蠣やらしいの買に行きやんねん、とれたての。「お前に、酔牡蠣食べさせたる」とか言うてな、「お父さんどこ行つたん、朝はよから」つて言つたら、お母さんに聞いたら、「あんたにな、牡蠣食べさす言うてな、明石まで行つたでー」言うて。

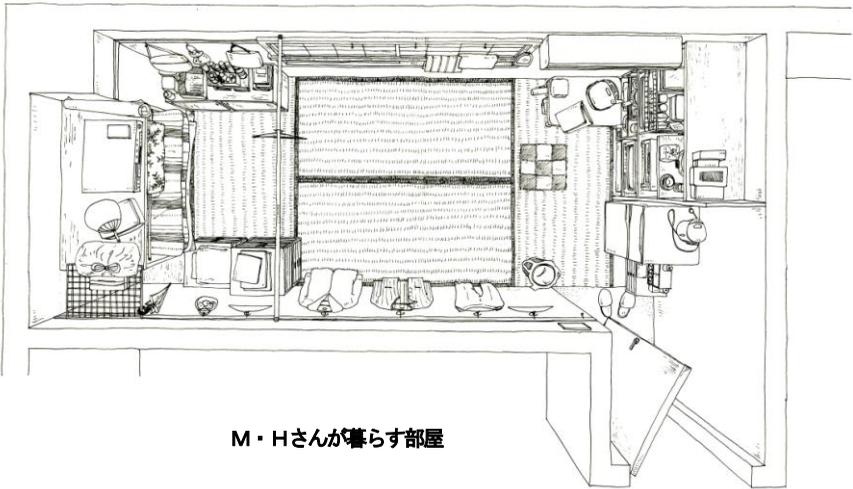
*

いつも朝は、平均八時に起きてる感じやね。コーヒーが好きやねん。自分で、ペーパーでコーヒーたててるよ。それとな、食パン買うて来てる。部屋にトースターなんかもあるし。今日は病院行かんならんから八時半にちよつと片付けて、コーヒーちよつとたてて、ほんで一〇時頃に出で行つたんやわ。病院混んでるから、中途半端に行つたらな、ものすご待たんならんからな。

病院終わったあと、お昼は外で食べて来たよ。お腹減ったから、中華食べて来た。私中華どんぶり好きやからな。まだな、こっちの方はおいしないで、どこはいつでも。鶴見橋のほうがいいね。中華丼五〇〇円やったわ。安かったで。それでも全部よう食べんからな。

前はな、足悪なる前は、その市民館でな、えーつと水曜日、いまは木曜もやつてるとか言うてたけどな、卓球行つててん。それで昔とった杵柄で、ちよつとママさん卓球やつててん。うちその頃、結婚してたからな、子どものPTAつてあるやんか。うちも役員もやつてたからな、グループでね。ソフトクラブとかな卓球クラブとかな、いろいろあつたんや、ママさんで、卓球にはいつててん。

そんなんで市民館でね、卓球はこないだまでやつてたよ。足が腫れたからやめてるけど、みんな「またおいでやー、おいでやー」つて言うてくれてる。お兄ちゃんな「おいでやー」つてこないだ窓から言うてくれて、「また行くわー」言うて、「ようなつたんかー、足」つて言うてくれて。「もうちよつと動けるようになったでー」言うたら、「無理せん程度に来たらええがなー」つて言うたつて。「けえへんかったら寂しいわー」言うて、ずーと行つてたから。もうぼちぼち治つたから行つてみようかつて言うてんやけど。ほんでも、ちよつとせんかったら働がにぶるな。



M・Hさんが暮らす部屋

「こどもの里」の子も卓球来たよ、あそこに前
おつた子が。そしたら前通つたら、ちょうど学校行っ
てるからな、前あつこにおつたけど、今もう小学生に
なつとるから、「遊びに来とつてな、おばちゃん」つ
て言うて。「卓球のおばちゃん」言うて。男の子な。
女の子もあそこのほら、イズミ屋の前の弘治小学校か、
あつこ行つてる女の子も知つてるわ。あの子もよう声
かけてくれる、会うたら。あの時小学校あの子、二年
か三年や言うとつたな。女の子な。たまにな、イズミ
屋へ行つて帰つて来たら、学校から出て会う時ある。
「おばちゃん」つて言うて、「あんたこの頃、卓球行
つとんのかー」ちゆうたら、「いま行つてへんねん、お
母さんがなんやらどうたらこうたらつて塾行けとかつ
てうるさいからどうたらこうたら」つて言つとつたわ。
たまーに出会うで。

私は手先のことはいあんまり不器用やからせえへんの
やけどな、額やらこしらえてたこともあつたよ、ビー
ズで。いまは部屋にもひとつもないけどな。みんなに
あげたから。みんなに「また作るわ」言うて、してへ
んねん。このころあかんねん。根気がなくなつてな。
肩凝つてくんねん。ほんで目がな、白内障ちよつとか
かつてきてるからな、だからあんまりせんぼうがええ
かなー思つて。あんなん作つたらな、私あかんねん。
できあがるまで一晩でも起きてやるから。知り合いの

結婚したとこの家にも、ひとつ置いてきてるわ。前に
阿倍野の近鉄百貨店行つてな、今はどうなつてるか知
らんけどな、前は教えてくれるとこあつて、そこでち
よつと教えてもろて、そんで家でやつてたから。あれ
まだ六〇歳になつてなかつた頃やね。

*

買い物は毎日行つてるよ。今日病院からの帰りもし
てきたもん。ぐるーと回つてな、買い物してくるよ。
今日も買い物して帰つて来た。買い物、そやな。やつ
ぱりある程度計算して買うてるやろ、そしたら頭のあ
れもましやる。ぼけ防止に。昨日もコーナン行つてな、
行くよ、歩いて。けつこう近いで。そんなかからへん
で。歩いて、気持ちよかつたで。風はあつたけどな。
コーナン行つてちよつと買い物してやけどな。今宮中
学校のところまっすぐ行けばいいやん。あと阿倍野く
らいまでやつたらいつも歩いてるもん。歩くのも運動
のひとつやな。

まあ買い物は、私は鶴見橋の方に行くことが多いな。
越前屋。スーパ一玉出もたまに行くよ。あとイズミ屋
もたまに行く。あんなスーパ一みな回つてな。豊島
屋は、今はあんまり行かんけど、一ヶ月に一回ぐらい
寄ることもあるわ。ここはこんなんで安いなあと思つ

たら買うしな、ほぼ見てるやんか、だから、向こうの方が安かったなとか頭にちやんとはいってるから。

ハヤシもたまに行くで。同じ品物でもな、越前屋とイズミ屋と値段違うしな、ほんで、どないかしたらイズミ屋が安い時もあるしな。そういうのは頭にいれてるからやな。豊島屋は値段がちよつと高いんだけど、玉出よりものがいいってみんな言うんで、たまに覗く時あるで。一ヶ月に一回くらいかな。ほんで、あわんなあと思つたら、何にも買わずに出てくるわ。越前屋の方が、品物がようはけてるやんか。回転がええからと思ふ点もある。ほんで、越前屋言うたらもうファミリー用の店なんで、その辺がちよつと。ハヤシはおととい行つた。ハヤシはな、だいたいな、行く目的はな、一〇〇円ショップをよう見に行くから。そのついでにちよつと見る時あるん。

*

このマンション、女のひともおるけど、けつこう仲良くしてるよ。三階におんねん、ひとりの女の人。いつもその人とお風呂一緒やし、冗談言うたりしてる。ここには子どもづれの女の人もおるよ。あの人はずーと歳が違うけどな。テレビの話、とりとめのない話やな。テレビの話とか、今日どこどこ行つて買

物したらあれが安かつたでとか、そいな話ばかり。で、小さい子と風呂はいるやん。女の人が体洗うたりしてるとき、小さい子の面倒みたりもするよ。それで、その子らが「わかくさ保育園」に行くわけやん。だから今まで、ぎょうさん子ども世話して来たなあ。

もうちよつとな、早うな、きりつけとつたら、もうちよつと私も楽やつたやろうと思うで。ただあれだよ、さつきも言つてたけど、体調が悪くなつたり、それだけが不安なのかな。夜中にな、具合悪なつたらどうしようかとか、そういう心配はしてる。人間つてわからへんからな。それでも男もういらんわ。もう何十年生きられへんのに、もう男はいらん。それよりも、自分で楽しんだ方がええわ。だから、ビーズづくりなんかした方がよっぽどええと思つてんねん。

釜ヶ崎 暮らしと居場所 三

話し手 石橋友美さん

西成区・釜ヶ崎に暮らすおっちゃんらによって結成された「紙芝居劇むすび」。生活保護受給する彼らは、同じ福祉マンションに住む「近所さん」どうしでもある。マンション横に設けられた事務所で、紙芝居の練習をしたり、紙芝居の絵を描いたり、あるいはコーヒーを飲みながら世間話をしたりすることが日々の楽しみとなっている。

むすびの活動を側面から支えているのがマネージャーを務める石橋友美さん。さまざまな過去を背負って釜ヶ崎にたどり着いたむすびのおっちゃんたちについて、石橋さんから話をうかがった。

むすびのメンバーなんだけど、むすびの活動に参加して、人によってなんだけど、いいふうに変化する人もいれば、そうでない方向に変化する人もいますね。よい方向に変化する人っていうのは、やっぱり自分の居場所っていうのができるじゃないですか。自分がいてもいい場所ですね。そういうのが、たぶん、いままでなかなかなかったんだと思うんですよ。たとえば、

みんな一〇代とかで家をできてくるんですけど、話を聞くとけっこう、なんていうんですか、育てられたのが継母だったりとか、農家で次男だったとか、家で居場所がなかった人が多いですね。出てきてずっと日雇いの労働などをして、ドヤに泊まってきたような生活を送ってきたわけだから、居場所ができたことによって、まずほっとしますよね。

つぎにいい変化があらわれるとしたら、その居場所ができたらそれを守ろうとするようになりますよね。自分はここの一員だっていう自覚がでて、それが誇りになるときがあるんですよ。このあいだも、ちらっとHさんが「わしもむすびの一員やな」って言ったときも誇らしげな顔をしてましたね。笑顔が自信で満ち溢れてて、胸を張っているかのように見えました。目なんかキラキラしてね。Hさんは参加して二年目ですね。いまむすびに残っているメンバーは、そういう意味では、むすびに参加していい変化をとげてきているように見えますね。Nさんも、「最近八〇歳になって私もようやくむすびの一員になりました」とか、わけのわからない冗談言っていました。むすびは八〇歳以上だと思っているのかな。ただ、それ言っているときのNさんの顔は自信にみなぎっていましたね。自分で守って、自分がいていい場所なんです。

むすびのメンバーは子ども期に、家庭環境にめぐま

れなかった人がほとんどのようです。結婚して、家庭つくって、子どもつくって、そのあるじになるべきおじさんたちなんだけど、そのへんに対する未練というか、悔いのようなものは残っていると思うんですよ、人生のうちで。でもいまこうして、自分もっている力をそそいで、そして身体をはって守って、自分のことを語り継いでいってくれる居場所ができたことは、かなり大きな自信につながっていると思います。メンバーが急にぬけたりしたら、自分が代わりに務める、そのへんのことを重く受けとめている感じですね。今日の紙芝居をちゃんと終えないとっていう使命ももってくれているようです。

むすびのなかでは、たとえばあそこにはお酒を飲んでは来ないっていう軽いルールのようなものから、他人に嫌な思いをさせないということとか、暗黙のルールのようなものがありますね。むすびのメンバーは基本的にあまりお酒を飲まない人がほとんどで、だからうまくいっているところもあるんですけど、いままでもお酒をよく飲む人は、そのお酒がやめられなくて、お酒でなにかトラブルったり、お金のことが問題となったりして、むすびから離れていく傾向があるんですね。お酒飲んでても、むすび続けていたら昼間のあいだはまぎらわすことはできるけど、でもやっぱりどこかで弱くなつてやめていってしまう。居続けていたら、

たぶん年齢も重ねていくし、お酒の量も減っていくんでしようけど、やめていく人はいますね。

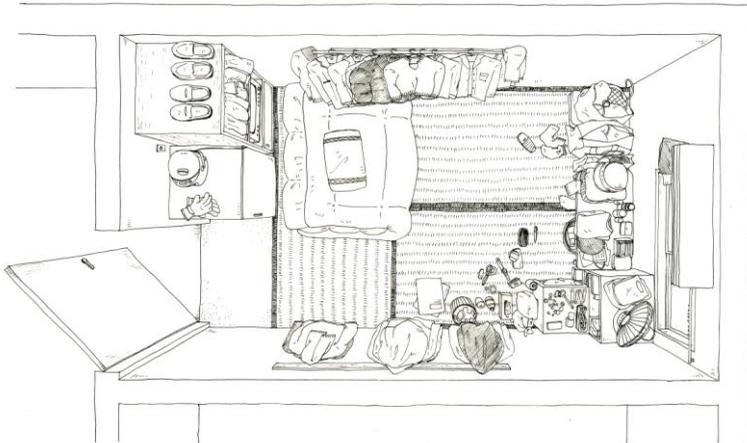
彼らは同じ福祉マンションに住んでいるんですけど、いろんな面で助けあいはしているようです。基本的ながお金の貸し借りで、「今月ちょっとないねん」とかから始まって、月末とかお金明らかにないときは、ご飯買えないだろうなとかって思いやって、そつと昼ごはん買ってきてくれたりとかありますね。そういうところはお互いさまって感じで、助けられた人はまたお金がいったときにお菓子買ってくるとか、そういうやり取りはあるようです。あとは病気の声の掛け合いですね。「しんどいんじゃないか」とか「病院行け」とか言ってますね。一時期Sさんが調子悪かったときに、Aさんがお弁当買つてもっていってあげたりとかしていた時期もありましたし。

いまむすびのメンバーでヘルパーさん頼んでいるのは二人ですね。ほんとうはほかの人も週に一回くらい部屋掃除とかでヘルパーさん頼つたらいいのって思う人もいますけど。でも本人が自分でやりたい、自分でね他人の力を借りずにやっていきたい、助けられることをあまり望まないという意志もあるようです。

*

むすびのメンバーのFさんが亡くなったのは、二〇〇九年のことでした。亡くなったことがわかってから、それから何週間かのあいだは身元確認とかで何もできませんでした。役所とか家族を探していたのかな。そのあとみんなで送る会をしたんですけど、Fさんの死というものを契機として、メンバーの考え方も変わってきた面あるようです。たぶん、むすびという居場所の意味をさらに深くとらえることができるようになってきたのではと思うんです。これまでは紙芝居を死ぬまでしとこうかいという感じだったんですけど、自分が死んだときに見送ってくれるのはこの人たちなんだと実感できるようになりました。実際にはFさんのお葬式ではあったんですけど、それぞれが自分の葬式と疑似体験したわけですね。自分が死んだらこうなると。泣いてる人がいるとか。

それまではおじさんたちは、自分が死んでも誰も泣いてはくれないと思っていなかったから。私も泣いていたんですけど。そしたらNさんがびっくりして、「泣いてくれるの？」みたいな。だから、ひよっとして私も仕事としてむすびとかかわっていただけだと思われていて、まさかメンバーが亡くなって涙を流すようなところのつながりはなかったのだと思われていたのかもしれないけども。たぶんそれではつきりと、亡くなって悼んでくれる仲間なんだと、みんなわかったんだ



紙芝居劇むすびのメンバーのひとりが暮らす部屋

と思います。だからお葬式のあと、みんなすがすがしい顔してたの覚えています。「いい葬式だったな」ってみんなで言っていましたね。ほんとうに意味があったお葬式だったと思います。

たぶんね、いちばん人間にとつてこわいことは、誰にも知られずに亡くなっていくことなんじゃないかと思うんですね。若いうちはね、むしろそれがいいような気になることもあるんですけど、誰にも知られずに死にたいなんて思うこともあるのかもしれないけど、死が間近にせまった当事者にとつてみると非常にこわいことなんですね。ひよっとすると、誰も死んでいることすらも気づかずに腐っていつてしまっていくのではないかとか。実際そういうことが目の前で起こっているわけですからね。ほんとに臭いがして中あけてみたら死んでいたりとか、いちばんこわいことなんだと思いますね。

あとお葬式行ったら誰も来てくれなかったりとか、参列者も誰もいなかったりとか、いちばん恐ろしいことではないのかと思います。自分たちもそういう人生送ってきたし、仕方ないことと思っていたんですね。まあ、「自分のせいだ、おれがやってきたことだから」とみんな言うんやけどね。でも実際は悲しいですよ。むすびから誰から順番に亡くなるかは知らないけど、でも自分が死んだら誰かが線香あげてくれるとか思っ

たらね、無碍にはできなくなるとは思うんですよ。

むすびの事務所にはFさんの遺影が飾ってあって、毎日のようにみんな噂話してますね。彼がつくった紙芝居の道具や絵なんかも残っていて、お面とかけっこのFさんがつくったの多いから、それ使うたびにみんな思いだすし、なんとなくいつも一緒にいる感じがするんだよね。死んでもみんなのところから消え去るのではなくって、ああこういうふうに残っていくもんだなって思うようになったのは、Fさんが亡くなってみてわかったことだと思えますね。このことは大きいですね。

*

私自身も、何十年先になるかはわからないけど、むすびにははいつてみたいです。紙芝居やるかどうかはわかんないけど。まあ、そのときのメンバーにもよるけど、歌うたうかもしれないし、踊りおどるかもしれないしね。でもなんかやっぱり、同年代の人とワイワイとできるといいですね。若い人の前で見せたりしてね。

六〇歳くらいからぼちぼちはいつて、で七五くらいで花ひらいて、八〇で円熟するみたい。そう思ったから人生ながくなるから、生きる目標がながくなるじゃ

ないですか。誰しも死の恐怖は避けることはできないんだけど、明日の朝起きてるかどうかかわからなくなるかもしれないけど、とくにあのくらしいの歳になると。でもまぎらわすことはなんとかできますよね、日中は。

ひとりで部屋におつたら、いつ死ぬんやろうとか、どんなふうに住ぬんやろうとかこわいことばかり考えると思うんですけど、とりあえず今日は寝て明日の紙芝居がんばろうとかっていうほうがいいと思うんです。

このあいだ、あるグループホームに行った時、ほんとになんというか宝物のような世界になってたんですよ。グループホームで普段見てる入居者のおじいちゃん、おばあちゃんの顔とは違うキラキラした顔になって。いつもあまりしゃべらなかつた人が積極的になつて。べつたりとか。いつも黙っているおじいちゃんが声だして笑つたとか、そういうのを見ると嬉しいみたいですね、むすびのおじいさんたちも。やっぱりその、同じ時代を生きてきた人にしかわからない、そのお互いわかりあうみたい。同じ年代だと、たいしたことはしゃべつてないんだけど、なんかみんなでうなずきあつて、グループホームの職員さんたちも驚いていたんです。

ほかの老人のグループや老人ホームでしてることも、まあまぎらわすっていう点ではいいのかもしれないけど。ただ夢があるかっていうと、来る日も来る日もカラオケ歌わされたりとかもね。むすびは、若い人たち

が出入りしていて、そして公演しに出かけていくっていうのが大きな武器になってると思いますね。先日、あるところの大きな福祉施設に行つてね、紙芝居をやったんですけど、いっぱい部屋があつて、それぞれでビリヤードやつたり、カラオケやつたり、もうお年寄りばかりなんですよね。麻雀やつたり。

「むすびも暇つぶしであることにはもちろん変わりないんだけど、いろんな風穴が開いていて「こんど公演にきませんか」とかお誘いがあつたりして、外にむけての展開があるのがいいと思います。だから来る日も来る日も同じメンバーで麻雀とかしても、まあそれはそれでおもしろいのだろうけど、夢というとなんだらうって思つたりもしますね。おじいさんたちがなを楽しみにしているかっていうと、新しい出会いがあつて、今日はどんな人とで会うんだらうというワクワク感なんですよね。それが既存の高齢者のグループにはなかなかないようにも感じられます。

のどかで安心して暮らせる日々の地盤があつてのことだと思えますが、むすびは紙芝居劇という道具でみずから世界を広げていけるということに強みがあると思います。

釜ヶ崎 暮らしと居場所 四

話し手 M・Tさん

生まれも育ちも大阪。年齢八二歳(男性)。いくつかの仕事を経て、二〇年前から西成区・釜ヶ崎に。現在は一泊二〇〇〇円のドヤで暮らす。年金を受給するが、ときどき特掃にでて道路清掃や警備の仕事もしている。散歩が好きで、これまでも関東炊きの隠れた名店、少し高まったところにあるチンチン電車の無人駅、無縁仏の納骨堂など、釜ヶ崎の散歩ポイントに私を連れて行ってくれたM・Tさん。そんな彼は、近所の飲食店で働くある外国人女性を母親にもつ小学一年生のアイちゃんのよき「おじいちゃん」でもある。釜ヶ崎の街が見渡せるビルの屋上で話しをつがった。

あるときな、ホームレスの人たち用に、おむすびやいろんなものこしらえて、みんな夜回りするようになったんやけど。そのときアイちゃんが、夜回り参加してる原田麻以ちゃんに手引してもらってずっと一緒に歩くようになったんや。月に一回やったかな、夜回り。そのうちに夜回りやってる麻以ちゃんのことを「麻以ねえちゃん、麻以ねえちゃん」って呼ぶように

なって親しくなったんやな。そして、いまでも麻以ちゃんやほかの人たちもアイちゃんと仲良くなって、みんなと絵描いたりもするようになったな。ほかのおっちゃんとかにも見せにいったら「うまいな」とか誉められたりもしてな。おれが被っていた帽子見たやろ。あの帽子の絵も全部描いてくれたんや、アイちゃんが。アイちゃんのお母さんは近くでお店やってるから、夜はアイちゃんずっとひとりや。お母さん遅いときは朝の五時くらいまで働いているからな。おれがアイちゃんの相手するのは八時くらいやな。ジャンジャン横丁のあたりも連れてったよ。みんな大事にしてくれるから。動物園前の商店街の食べ物屋にもよう連れてったよ。アイちゃんは、おれのことを「おじいちゃん」って呼んでるわ。

おれ、アルミ缶の蓋集めてるの知ってるやろ？ あれはあるボランティアの人から教えてもらったん。ビールの缶、一五缶分の蓋を集めるのが、おれの担当やねん。話を聞いたんは三年くらい前。で実際にやりだしたのは一年くらい前かな。いま一四缶とちよっと、これくらいたまってるやろ。おれも道歩いたりして空き缶の蓋拾うのやってきたからな。一番多いのはセンターやな。ホテルの前とかもな。センターのとこでずっと歩いて、よう拾ったで。あこ多いからな。あと西成の道歩いてるやろ。

ボランティアというのは、何のためにやるのかっていうたら、その、貧しい人とか、老人の人たちとか、歩けない人とかいてるわな。あの人たちに、車椅子をもらうために、そういう活動があることを知ったから、それでやっただけの話で、そういう活動あること知らなかったらやっつてなかったな。あんな馬鹿げたことやっつてなかったな。こんな馬鹿げたことなかなか、普通の人間ではできへんわ。やっつてる人はみんなちゃんとした人が多いけど、ホームレスの人もいてるわ。けっこういてる、西成でな。あことこな、おれいれて三人くらいいてるな。朝行くやろ。ほんだらもうとつてる人いてるからな。ちゃんと顔見たことはないけどな。まあ、確かにそういう人が増えていくことはいけな。ことやな。

おれ、路上で寝てる人の知り合いおるやろ。あの人らとは、自然のうちになだ親しくなつていつただけやで。あの人らと同じ西成にいてるから「一緒にビール飲もかっ」ってビール買うてきてビール一緒に飲んだりしただけやな。まああの人らも自立したらいいなと思うけど、ただおれはビール買うてきたり、煙草買うてきたりしただけやで。おれは煙草吸わへんけどな。彼らにあげたりしてるのは、いい方向に向かつてほしいという気持ちがあるからや。いい方向に、彼らがな。おれは偉いとは何も思わんし、おれ自身は心でやっつ

るだけであつてな、なにも返してもらおうとかな、彼らを利用しようとか、そんなつもり全然ない。

*

人の過去のこととか、ここではそんなこと聞いたらあかんや。日頃のおれ見たら一番ようわかるやん。そんなことぼくが説明せんでもな、日頃のおれを見てたらわかるやん。つまりな、ジブンは知りたいかもわからんけど、西成の人にそんなこと聞いたらあかんや。おれやからええけど。はつきり言うて、どんなことやつてきたとか、どんな仕事してきたとか、そんなことここでは一番嫌うことや。どんなことやつてきたつて、そりやすごいことやつてきたもんもいてるし。そんなことおれが説明せんでもな、日頃のおれを見てたらよくわかるやろ。「おれのことほつといてくれ」と、怒るのもいてるで。自分のこと話したくないもんばっかしや、このへんでは。それだけははつきり言つとくわ。それでも、おれはこの街で好きな人は多いな。好きな人はたくさんいるわ。たとえばホームレスの人とか。ふと立ち止まって話したときに、ほんとに信頼して話してくれることもあれば、「お前、何言うとんねん」と言われたこともあるし、馬鹿にされたこともある。そういう人たちの話しのなかで、ぼくはそういう人た

ちのこと何も憎んでもないし、その人たち今日は気分悪いんやなど、そう思ってるだけで、悪いときに話しかけたからやめとけばよかつたなど、自分を反省するときが多いけど、やっぱりうれしい人たちが多いな。酒飲みに行っても、いい人がたくさんいてるし、一部の人間が悪いだけで、すばらしい人のほうが多い。

おれなんかよく路上で話しすんのやけど、前に天王寺の駅でな、京大卒の人がおって、蒼い顔してたよ。京大卒ってわかつたんは、一緒に段ボールで寝ててわかつた。そんなおもしろい話もあるわ。そんなそのときにぼくのことを、「あなたはこんなところで寝てるような人と違う」って言って二〇〇〇円渡してくれてな。おれはそんなんされるの嫌やから、「いや、いいです」って言ったんやけど。それから、とりあえず二〇〇〇円返すために何回も天王寺行つたけど、その人は見えへんかつたもんな。もう二度と会えへん。

*

おれは散歩が好きで、夜の一二時でも時々歩いてるよ。ホームレスの人と一緒に酒飲んどる。センターの周辺が多いな。越冬の時、医療センターの下で寝たこともあるよ。寝る部屋はあつたんやけど、一回寝たれと思つてな。何でも経験せなんとあかん。「自分自身、

飛び込んでみる」って君によく言うやろ。人に話し聞くのもいいけど、自分が体験せなあかんで。経験したらよーくわかるやろ。外で寝るのも、自分で体験して、どんな気分かはじめてわかる。金がなくてラーメン一杯もろうた話とか、そんなん経験しないとわからへんやん。「百聞は一見にしかず」って言うやん。そりや死ぬ思いするかもしれん。その場で殺されるかもしらん。だけど経験が大事や。死んでしまつたらそれで終わりや。西成ってそんなとこや。

おれが西成に来て、もう二〇年になるな。ほんとの家はすぐ近くやねん。大阪生まれの大阪育ちやで。ここから電車で帰つたら四五分や。四五分あつたら家帰れるねん。まあいろんなことあつて勘当されたから。友だちもみんな心配してくれてな。おれの両親は心がすごい優しい人やつたな。たとえば、あの、終戦直後な、韓国の人なんかいるやん。韓国の人なんかほんとに日本人にいじめられたわけや。うちの母親な、米もつていつてあげたりな、野菜もつていつてあげたり、その、弱い人を大事にした。あれは立派やつた。

だかれおれは今でも弱い人見たら、たとえ一〇〇円しかもつてなくても五〇円の飲み物買つて、ホームレスの人が寒そうにしてたら、五〇円のお茶飲ませてあげたりする。いま生野あたりの三世、四世の人たちいてるけど、おれの顔見たら、いま成功したのもあるけ

どな、おれの顔見たらとんでくる。日本人でも韓国人のこと大事にしてあげたことは、あれはいまでも覚えてくれる。

父親は厳しい人やったな。でも厳しさのなかに、優しさのあった人やった。だからぼくは、親を恨んでたりとかはない。あと三人の、姉二人と兄は、非常に優しい。ぼくは結婚はせえへんかったけど、義理の兄さんとか姉さんとかも非常にできた人で、ぼくをものすごく大事にしてくれる。だから働いててもよう小遣いくれたわ、働いててもな。

父親は男やからあんまりしゃべらんかったけど、言われてひとつだけ守ったことがある。「死ぬまで働け」。これは守った。「死ぬまで働け」ってのはずーっと守ってきた。ひとつだけ守ってきた。だからいまのおれがある。自分自身苦しいときがあったけど、ちゃんと働くことだけ働いたわ。だからいまおれ、苦しみも何もありません。西成の人は生活保護の人、多いやん。おれは一回ももらったことあらへん。というのは父親との約束あつて、おれもあほやけど、働くことだけは、いままで働いてきた。だから若い人もっと働かなあかん。ちゃんと生活せなあかん。おれ勘当された身やろ。這いあがるのにどれだけ苦労したことか。おれ親不孝して、自分自身苦しい思いしてきたから。そやからおれは厳しいこと言ってるわけ。

釜ヶ崎、暮らしと居場所 五

話し手 K・iさん

日雇い労働者の街であった釜ヶ崎も、仕事の数が減り、労働者の数よりも生活保護受給者の数のほうが多くなってきた。それと同時に、かつてのドヤも、生活保護受給者を対象とした福祉マンションへの転用がすすんできている。

よりよい福祉マンションづくりを目指すために、サポーターハウス連絡協議会が結成され、現在約一〇軒のサポーターハウスが、この街には存在する。サポーターハウスとは従来の福祉マンションの一形態であり、野宿状態などにある人びとの生活再建をお手伝いするためのさまざまな工夫がなされているのが特徴である。こうしたサポーターハウスで相談員として働くK・i（女性）さんに話をうかがった。

あそこで働くようになって五年になります。前に勤めていた会社を辞めてしまい、失業して、身体の調子もよくないし、精神的にも調子よくない。働く意欲も

あまりなかった状態でいたんですけれど、一応毎週毎週求人誌みたいなものは見てはいたんですね。いろいろ見て私には務まらないと思っていたんですけれど、ある日、求人誌を見て、「あれっ、これちよっといけるんではないかな」と思えるのがあったんです。

「相談員」っていう名目で求人があったんですね。「福祉の現場で働いてみませんか？」ってあって、ほかの求人と色合いが違うなと感じて、応募してみようかなってなぜか思ったんです。私でもいけるかもしれないって。「福祉」っていうことで惹かれたというよりは、私は鍼灸師の資格もあって、相談員という募集だったので、わりと人の話は聞いたりするのはできるのかなって、というのがありましたね。

釜ヶ崎の街のことについては、働き始める時点で私はほとんど何も知りませんでした。この街がどんなところなのかということもぜんぜん知らなかったのですが、だからどんな仕事をするのかということもよくわからず、「自立の支援をする仕事」ということを言われたけれど、具体的にどんなことなのかもよくわからなかったし、そこが悪徳かもしれないっていう可能性もあったんだけど、それもそのときはよく知りませんでした。面接に行ったときも、「この街のこと、こわくないですか？」とかいろいろ聞かれたんだけど、とにかく「私、何も知りません。身体の具合も悪くって役にたちませ

んよ。」ってアピールしたんですね。何もわからないけど、採用になったら働こうと思っていたら、採用になったんですね。

働き始めた頃は、仕事する内容についての意欲とか希望とかは特にはありませんでした。あそこは二〇人くらい住んでるんですけれど、その人たちの顔と名前を覚えなさいといけないなど、とにかく覚えることがたくさんありました。どうやって覚えていいかもわからないし、そんな状態だったんですけど、いまはもう全員覚えてます。三ヶ月以上かかたっと思えますね。特徴がある人から、たとえばホクロがある人とか、よく見かける人とかから、ゆっくり覚えていきましたね。毎日見る人と全然部屋から出てこられない人とかいえますね。

仕事でどんなことするのかっていうのは、はじめのころからだいたい知らされていたので、ある程度わかってきてはいたんですけど、いまよく聞く貧困ビジネスではないかっていう不安もまったくないわけではなかったですね。実際に働いてみたら、もちろん商売でやってるわけだからガメツイところはあるんですけども、この街に詳しい人に聞いたら、このマンションは悪いところではないっていう感じで、金銭的な管理はしっかりしてるし、不正もなさそうなので、やっていけるかなって思いました。家賃は、生活保護の住宅扶助の上

限いっばいの四万二〇〇〇円です。

職場には七人くらいスタッフがいて仕事をしているんですけど、私がおもにする仕事は、ゴミを集めることと、日報といって毎日どんなことがあったかかっていうことを記録してます。一日一枚の紙に今日こんなことがありましたってことを書いてます。それと別に個人ごとのファイルがあつて、「〇〇さんがこんなことしました」って記録もつけてますね。今日これから仕事いったら、たとえば〇〇さんが救急車で入院しましたってあれば、それをファイルに書きこんでますが、そんなのも私の仕事です。個人ファイルに書きこむ内容は、介護に関することや身体の調子のこと、お酒がらみのこととか、何かトラブルがあつたときとかのことなんかも多いですね。あと交友関係で何かあれば書きますし、お金がらみのことなんかもありますね。

このファイルは、その人がどんな生活してたっていう記録にもなるから、めったにあることではないんだけど、たとえば誰か亡くなったときに遺族のかたに見せたり、入退院くりかえしたりしたときなんかも参照したりします。あとは受付・事務所に座っているっていうのも大事な仕事なんです。

*

ゴミ集めのことなんですけど、ゴミはフロアごとにゴミ捨て場があつて、そこにたまつたゴミを集めます。ゴミに注目することは、ものすごくおもしろいですね。たとえば、保護費がでた直後と月末のみんなお金がないピンチのときとでは、ゴミがでる量が圧倒的に違います。あるいは、普段捨てられていないゴミが続けて捨てられているときは、「あれっ、これは何があつたのかな」ということを考えたりしますね。氷売つてるのであるでしょ。コンビニなんかで売つて、ビニール袋にはいってるやつ。あれの溶けたのが何日間か、たて続けに捨てられていることがあつたのね。氷、開封してないんだけど、溶けちゃつて水になつたのが二個、三個と捨てられているのが続いたことがあつて、「これはなんだ？」って思つたんですね。

で、あれおかしいなと思つて、いろいろと考えて、これはあの人かなつて思つたんです。で、これはあの人かなつて思つたのは、「顔がほてる、ほてる」って言つてた人がいたんですね。それでほかのスタッフに、「ひよつとして、〇〇さん、氷買つてきてない？」って聞いたの。そして、溶けた氷がゴミとなつていていたことを話したら、そのスタッフは「あつ、確かに氷買つてきてました」って言ったの。顔か頭の熱を下げるための冷却用の氷だったんですね。要するに、こういうゴミを見ることによって、マンションの住民の状

態なんかがわかることもあるわけですね。なんで水が捨ててあるんだろうって、謎だったんだけど、それが解明できたことはなんか幸せでしたね。細かいことではあるんだけど、こんなわけでゴミ集めにも意義があるんじゃないかと思ったりします。

受付に座るということなんですけど、毎日だいたい似たような時間に出たりはいったりする人をただ見て、「いつてらっしゃい」、「おかえり」ってただ挨拶するだけなんです。それでも毎日毎日続けていると、帽子かぶっているのに丸刈りの人が床屋さんに行ってきたのがわかったりするのね。それで「あ、床屋さん行ったんだねー」とか言いますね。そうすると「あ、行ってきたー」って返事で、よく気づいてくれたんだねっていう反応してくれますね。

普段はだいたい決まった時間にてくるのに、姿が見えないとかあつたら、もしかしたら体調崩しているのではないかと注意してみたりしますね。三日間見かけない人があつたときは、お部屋を訪問してノックすることもあります。ほとんどの場合は特になにもないケースが多いのだけれど、場合によっては体調が悪くて「食べてないねん」とか言われたり、発作を起こして倒れていたり、最悪の場合は亡くなっていたりということもありますね。私は亡くなられているというケースは直面していませんが。

この仕事を始めたころは、マンションの住人のかたがたのことを、「何この人たち面倒くさいな」と思っていたこともあつたんですけど、いまは淡々と仕事に行けるようになりましたね。この仕事がつらいとかしんどいとかは、最近はまだあまり思わなくなってきましたね。はじめてから五年たっているから、私も五つ年齢を重ねているわけだし、住んではるかたたちも五歳、歳をとっているわけで、おとなしくなってきたっていうのはあるかもしれないですね。あと酔っぱらって失禁してしまったとかの場合も、最初の頃は「何なの？」って目くじらたてたときもありましたけれど、最近では「あーあ」って感じで対処できるようになってきました。

*

五年間というわけっこうながいようにもみえるけど、ほんとに挨拶するだけの人もいるので、よくわからなかつたりもすることも多いですね。でもやっぱりここに住んでいる人たちに助けてもらっているというのが自分のなかであります。ゴミ集めしていても、大変だね、がんばってるねーって声かけてもらえるのは、自分が支援しているというよりも、逆に私が支えられているという感じがあるのですね。

だから仕事がつらいと思うことはあまりないです。むしろ自分がしんどいときに仕事に行ったら、楽になれる場合も多いですね。あと自分がすごく落ち込んでいるときとか、ひとりで家にいて寂しいなと思ったときなんかも、あそこに住んでる人たちは、パソコンも何もない三畳の部屋でみんなひとりでいるんだなって思ったら、ああ私には電話したりメールしたりする友だちもいるしと思え、いろんなことに耐えられるようにもなりました。

ほかのスタッフやオーナーとかが、おっちゃんたちに「普通はこういうことじゃないでしょ？」って感じで言うことがあるんだけど、そういうのを聞くのがつらいと思うことはありません。普通とか一般常識から外れてしまったおっちゃんたちが、ダメな人と決めつけられるのを聞くのはつらいですね。そんな風に言われなくたっていいじゃないと。自分が非難されているように感じられて、そういうことに関してはずらいと感じますね。

一般社会の常識とはあわないような生活が否定されるようなときですね。私が何か言ったときに、「ああ、それではここのおっちゃんたちと一緒にじゃんっ」って言われるときがあるんだけど、私はこう言います。「はい、一緒ですよ！ それでだめなんっ」って感じでね。

コラム●一

ヨコルームという居場所

石川 翠

ヨコルームを訪問するようになったきっかけは、大阪府立大学の工藤宏司先生からの紹介だった。「釜ヶ崎にヨコルームというアート団体があつたよ」と言われたものの、ピンとこなかつた。「釜ヶ崎」は「貧困」の象徴くらいに思っていた私は、「釜ヶ崎」と「アート」という言葉が結びつかなかつた。卒業論文のテーマを決めかねていたということもあり、「アート」が何なのかよくわからないまま、とりあえず行ってみることにした。釜ヶ崎という慣れない地域で、ヨコルームという不思議な店に入っていくことは勇気がいることだつた。緑色に塗られた食器棚の隣にピンクの冷蔵庫、そんなド派手な店内には隙間なく本や楽器や椅子などが置かれ、頭の中の情報処理が追いつかない。そのうえ常連らしき客に話しかけれ、初対面の人と話すのが得意ではない私は始終緊張しっぱなしだつた。商店街を歩き交う人ひとに丸見えの、公開お茶の間のようなメディアセンターはさらに落ち着かない。結局初日はよくわからない状態のまま帰つていってしまった。それから何度か足を運んだが、どうも「アート」というのが理解できず、意味不明の団体に思えた。絵を描いたりすることが何の意味があるのだろうか。この逼迫した地域ではなまぬるい活動に思え、だんだんヨコルームに向かう足が重くなつた。

しばらく間をあけて、研究のためではなく一客として見てみようとは半ば投げやりな気持ちでイベントに参加した。どんな反応が返ってくるか考えずに話してみると、参加者みんなが真剣な表情で聞いてくれている。不思議と自分のことまで話していた。その場は今までの違う感覚だった。それまでは、研究対象としてしかの場を見ようとしていなかったのだと気づいた。そして、アートという、自分の中で分類できないものに対する偏見があったのだと思う。釜ヶ崎に対しても、「貧困」という捉え方しかしていなかった。ここにはマイナスの要素だけではないものがある。「つながり」のなかで生きる人間にとつて大切なものがあると感じるようになった。そう考えたのも、釜ヶ崎をコールドームをとおりて見たからだっつ。

「コールドームには、年齢も職業も出生地も育った環境もバツバラの、本当にさまざまな人がやってくる。そして話をしたり、一緒に絵を描いたり、ときには喧嘩をしている。そことは違う環境で育ってきた私は、どのように立ち振る舞えばいいのかかわからず、とにかく話を聞くだけ聞いて帰るといつ日が続いた。そんな関わり方だったので、毎回愛に疲れてしまっていたことを覚えていた。そのときは、まったく共通点のない者同士が真剣に話をするというところなどきかないと正直思っていた。だから、自分の言葉に自信もななく、もしかすると知らぬ間に誰かを傷つけてしまっかも思わないと思いつ、何も話せなかった。

今の時代で、人と本音を話し合うことができなくなった場所を見つめることは難しいだろう。とくに「空気を読む」と言われている若い世代にとつては簡単にはできるものではないのかもしれない。均質化して制度化された今の社会では、分類できない「意味不明なもの」がどんどん切り

捨てられていく。そのような環境で育つと、よくわからない、理解できないものに恐怖を感じ、耳をふさいでしまう。しかし、そうすることはその理解不能なものを切り捨てると同時に、「自分自身の一部をも切り捨てることになる。自分に受け入れ難いことや、予期せぬことが起こったときに、受け入れられない。均質化された領域の外に出してしまう恐怖や不安が、息苦しさとして生みつき、自らとして表れているのではないだろうか。意味不明なものを認めることは、自分にとつても生きやすい環境をつくりていくことになる。」とコールドームに通ううちに考えるようになった。

家や学校にこもって論文を書くことに疲れると、パソコンを担いでコールドームカフェに向く。カランカランとベルを鳴らしドアを開けるといつものようにカウンターから岡本さんが「おはよう」と言っている目には私の論文の進行状況を心配してくれる。Sさんは大きな声で「おう」と手をあげて、私が荷物を置くなり最近コールドームで出た女の子の話をしだす。毎回違う女の子が会話に出てきて誰が誰かわからなくなるが、話をしているとSさんがすぐにいろんな人と仲良くなるのがわかる。いつも気を利かせてくれる彼は私がパソコンを取り出すと同時に奥の畳のスペースのちゃぶ台を移動し、延長コードを持ってきてプラグを差してくれる。仕事もきつと早いのだろうか、なぜとぼんやりしている私をよそに準備はとろくに終わっていて、お礼を言うと関東弁で「いんだよ」と一言、自分の座っていた席に戻っていく。

ホットコーヒーを飲みながらポチポチとキーボードを打っている、ギャンブル好きのーさんがカランカランとドアを開けて入ってくる。しばらく立ったまま店内を見渡し、「麻いちちゃんっ」と岡本さんに聞

く。そのうち原田さんが現れ、「麻以ちゃん麻以ちゃん」と言っ
て行く。皆さんの話を慣れた様子で作業をしながら聞いている。しばらくして
小柄なおじいちゃんのAさんが弁当を片手に入ってくる。おもちゃや
人形が好きで、今日も近くの露店で買ったという注射器型のポー
ルペンを見せてくれた。気に入ったようで、手に握りしめたまま帰るう
とすると、「それ、ここで持ってたら警察に捕まるぞ」とお客さんに言わ
れ、カエにいたみんなが一斉に笑う。ああまさ「それが」コルームの雰
囲気だな、と笑いながらふと思っ。

畳スペースは壁に背を向けて座っていると店内が一望きるため、た
まに劇でも見ているかのような気分になる。と言っても自分も観客に
近いが出演者でもある。ここに来なければなかった出会いがたくさん
あつただろうと思つと、卒業論文を書くという目的ではあつたが、そ
れ以上のものを得たとつくつく思ふ。なんとなくやつて来てしまった「
コルームが私の居場所のひとつになった。

コラム二

ゆるやかにつながらるコレクティブ・タウン ..

「孤族」社会の提言

ありむら 潜

最近、私たちは生活保護受給者だけでなく孤立しがちな人たち全
般への支援策として、「コレクティブ・タウン」(造語)という考え方を
広め始めた。コレクティブの直訳は「共同の、共有の」である。

そうした人々が求めるのはゆるやかなつながり・やわらかい参加で
あって、強い連帯ではない。それに合致するしくみづくりのヒント
は釜ヶ崎にある。ここでは多くがいゆる無縁者。最近の言い方で
は孤族だ。しかし、街を歩けば、かつて建設現場や求職窓口等で
接点のある「ゆるい顔見知り」がけっこう多い。一人ひとりは一
匹狼でも、着かず離れずの距離で仕事情報の交換や世間話をした
りする。気ままに成り立つ縁だ。路上で将棋をぞろぞろ風量奪奪せめる。
長年の居住政策不在のおかげで、人々の住居は簡易宿泊所の、ただ
寝るだけの狭小の個室である。本来居室内に持つべき生活機能が路
上や公園に外延的にあふれていかなるを得ない。とりわけ、団ら
ん・交流機能がそつ。人々はその他にあいりん総合センター内の日
雇い寄せ場(求人求職の場所)等々でも創造的に気ままに「ひろ
ば」として使う。そして「ひろば」とは現代のキーワードⅡ「居場
所」と同義語になる。釜ヶ崎はいわば天然のコレクティブ・タウン
だ。

一般住宅でいえば、コミュニティ・センター的ハードもつたが、
犬の散歩を通じて自然発生する井戸端会議や近隣の助け合い等も
コレクティブな事象である。北欧発のコレクティブ・ハウジングが
「建物にコミュニティ(まち的要素)を組み込む」に対して、「ま
ち」(コミュニティ)を住まいの一部として「つくらせる」。コレクティ
ブ・タウンの成立要件は、ハードの問題よりも、空間の利用のしか
ただ。住民主導でできる「こどももある。そういうものをしかける。
まちづくりって、やはりおもしろい」(初出『福祉の広場』二〇

一一年三月号)

コラム 三

共生システムとしての城崎温泉：

金峯崎の街づくりを構想するためのひとつの視点

岡本マサヒロ

いまから二〇年余り前のことである。アフリカでの滞在を終えて帰国し、新聞を読んでいたら、阪神淡路大地震のあとにできたある宿屋についての記事を目にした。それは一〇人ほどしか宿泊できない小さな宿なのであるが、食事も用意しなければ、風呂もないという。そのかわりに宿泊客には、よい食卓を紹介するし、また近所の銭湯を利用してもらうというのだ。このようにして、震災で打撃を受けた街全体の活性化をはかることがねらいとある。この記事を読み、日本でもアフリカの共生システムが評価されるような素地があるのだと感心した。アフリカの共生システムというのは、あるものを複数のものでシェアするといふことである。この場合ロでいうと、ひとりの客を一軒の宿屋だけで独占するのではなく、地域社会全体で共有しようといふことになる。これと似たようなことをかつて訪ねた城崎温泉でも経験したので紹介したい。

城崎の温泉には「内湯」と「外湯」の二種類がある。内湯とは旅館内に設けられた温泉であり、外湯とは旅館の外にある公共の温泉である。客は宿泊した旅館の内湯を利用するのではなく、外湯を利用するよう奨励されている。宿泊客には、「外湯めぐり入浴券」なるものが配布され、通常は一回につき数百円支払って外湯を利用す

るところ、宿泊客は無料で何回でも外湯を楽しむことができるようになっていて、無料であるため、客は一度だけではなく何度も入浴を楽しむことになる。このように宿泊客をひとつの宿のなかに押し込めておくのではなく、外に排出することによって、結果的に街全体が活気を帯びてくることになる。

宿泊客には、手拭いの他、浴衣や上着、下駄、小物袋や手提げ籠といった湯めぐりに必要なアイテムが各旅館から貸与される。普段着すなわち日常着から浴衣という非日常着に着替えることによつて、客は晴れやかな気分温泉街を歩くことができることも、街全体には浴衣姿の温泉客があちこちから見受けられるといった風情ある景観をつくりあげることにもつながっている。浴衣や上着のデザインは宿ごとに趣向をこらまれており、見ているだけで楽しい。また下駄には宿名が表記されているため、外湯の下足番は下駄を確認することにより、非宿泊客による無料入浴券の不正使用を防ぐことにも役立つている。

ところで他の温泉街と同じように、城崎にも遊戯場がみられる。驚いたのが、スマートボールや射的といった昔ながらの遊技場がけっこう繁盛していることである。他の温泉街では閑古鳥が鳴いているような素朴な遊技場にも客が足を運ぶため、街全体の活性化につながるわけであるが、このことを支えているのが、宿に客を囲わないでできるだけ宿の外に出てもらおうという外湯奨励の制度であるといつてよい。また城崎では、多くの旅館には土産屋もおかれていない。土産を買いだす客は、街の土産物専門店を買ってくださという考えからである。

さて肝心の外湯は温泉街に六カ所存在する。一番遠い湯でも一〇分ほど歩いて行ける距離にあるから、気楽に湯めぐりをすることが出来る。ここで面白いと思つたことは、それぞれの外湯には伝説あるいは縁起ともいえるような由来譚が伝えられていることだ。たとえば、もつとも古い歴史をもつとされている「鶴の湯」はコウノトリがその湯で傷を癒したことからその名が付けられており、しあわせを招く湯として説明されている。「地藏湯」には湯元から地藏尊が発見されたからという由来があり、衆生救いの湯とうたわれている。その他紹介すると、「まんだら湯」が一生一願の湯、「御所湯」が美人の湯、「柳湯」が子授けの湯、「一の湯」が開運招福の湯といった具合である。どの湯も泉質は同じであるのに、各湯に由来譚に基づくもつとつこの効能を付加することにより、客がより多くの湯をめぐるつみたいたいと思つようになつたことはきわめて自然なことである。

日本各地の従来の温泉地の多くが衰退しているなかで、上述のように複数の要素が絡みあつて、城崎の温泉街づくりは成功しているようにみえた。城崎温泉は大正期の震災で崩壊し、そこから立ちあがつたという歴史がある。また湯量が減つてしまつたとき内湯を制限するなどして、温泉という共有資源をみずからの手でコントロールしたところ、のちに温泉街が栄えた時期にはびこつた暴力団の追放に成功したという経緯も忘れてはならない。と同時に、温泉街における旅館、外湯、遊戯場、土産屋その他を巻き込んだ共生システムが、街の活性化に果たしている役割はきわめて大きいといえる。それはすべての機能をひとつに兼ね備えた巨大リゾートホテルの

発想とは根本的に異なるものである。

こうした城崎温泉にみられる特徴は、私がいま暮らす西成・釜ヶ崎の街にも通ずるものがあるといえそうだ。釜ヶ崎では近年、福祉マンションが増えたとはいえ、一泊一〇〇〇円代で宿泊できるドヤと呼ばれる簡易宿所で寝泊まりしている者も多い。私も数ヶ月間、ドヤに滞在したことがあるが、三畳一間にあるものはテレビ、小型冷蔵庫、ちやぶ台程度であり、毎日を過ごすにはあまりに狭く退屈な環境であつた。幸いなことに釜ヶ崎には数多くの喫茶店がある。私は喫茶店でコーヒーを飲みながら新聞を読むことを日課としていたが、そのような流れでコールドにも通つようになつた。

コールドには新聞は置かれていないが、モーニングを手伝つているスタッフやたまたま隣りあわせのお客と自由に会話できる雰囲気がある。そんな些細なことが、殺風景な毎日にくアクセントを与えてくれた。そして、こうした時間が自分の「人間性」を維持するうえで大事であつたと思つ。釜ヶ崎のドヤがすべて巨大リゾートホテルのようであつたら、このような機会は半減してしまつていない。この街には飲食店の他にも銭湯、理髮店、商店、教会や支援団体の施設、公園など、人ひとが立ち寄ることが出来る小さな拠点がいくつかある。それらを巻き込んだ共生システムのなかに地域社会の活性化、あるいは暮らしやすい街づくりを構想するうえで重要なヒントがあつと思つ。

第二部

論考

釜ヶ崎 暮らしと居場所

論考 一

社会に参加する人々の生活と生き残り

上田假奈代

釜ヶ崎というまちについては、さまざまな捉え方がある。二〇一一年初頭に思うことは、このまちの周縁化された歴史に紡がれる「縁」のおもしろさと、そしてこの

まちに暮らす人の高齢化だ。わたしが釜ヶ崎に足を運び始めたのは二〇〇三年であるが、その当時から高齢化はおおきな問題であった。日雇い労働者のまち・釜ヶ崎で労働者が高齢化し、日本のバブルがはじけたときに、釜ヶ崎のドヤを利用していた労働者たちは路上生活をはじめた。野宿者の数がピークだったのは一九九九年から二〇〇〇年と聞くと、二〇〇三年となると、野宿者は生活保護へと変わっていった頃である。労働者から野宿者そしてまちの住人となった多くの人たちは、あてどなくうろろろしながら、あるいはひきこもりがちになりながら生活していたように思う。さらに二〇〇八年にリーマンショックがあり、新たな流入層（困難な事情を持つ人が多いと思われる）も増えているように感じられる。とはいえ、釜ヶ崎

にはさまざまな事情をもつ人たちがつねに流動的に出入りしている印象もある。その懐の深さ、過去を尋ねず、尋ねられず生きていける場所というのが何よりも釜ヶ崎の特徴かもしれない。

高齢化の問題のすぐ先には「死」の問題がある。身内がない、いても引き取らないケースも多く、無縁死となる。釜ヶ崎では血縁ではない「縁」で看取られている例は寺川氏の論考でも触れられているが、ひとつのエピソードを紹介したい。

ホームレスやリストラ、家族との別離を経験し、釜ヶ崎で生活保護を受給するおじさんたちのグループ紙芝居劇「むすび」。メンバーのFさんが亡くなったときのことだ。たまたまドヤの一室で亡くなり「身元不明者」として、すぐに葬儀をとりおこなうことができなかった。遺族がさがしだされたが、もう五〇年も連絡がとれなかったために、複雑な気持ちにつつまれたのだろう。その死にたいし何もかもが保留にされ、遺体は冷凍庫に入れられた。

「むすび」の仲間たちはすぐに行動し、一週間後にFさんの写真を飾り、お別れ会をひらいた。歌あり、紙芝居ありと楽しい会々、Fさんをおおくるにふさわしいものであった。肝心のお葬式は遺族の返事待ちであった。そして半年後、遺族は「引き取らない」という返事をかえし、あらためて葬儀が営まれた。

仕事帰りの深夜、通夜に訪れたわたしは、Fさんの棺桶からぼとぼと滴の落ちる音とともに涙した。告別式にはこれまで親しくしてきたお坊さんがお経をあげてくれ、五〇人ほどの人が集まった。生活保護受給者の葬儀の参列者はほとんどないことから鑑みれば、五〇人というのは珍しい葬儀である。「むすび」の活動を通して、多くの人がFさんとむすびあえたということだ。

「むすび」のメンバーは自分がこうして見送られることを感じたのだろう。その後、仲間たちのむすびつきがもっと強くなったように思われる。仲間たちがFさんの死を胸に厳かに持つていることをいままも時折気づかされる。この遺族にも晩年仲間たちとこうして活動できたことをお伝えできたら、と思っている。

若い世代の多くにとって「死」は遠いものとして捉えられているのではないだろうか。病院で最後を迎える人がふえ、死のありようが何だかわからないものとして存在する。釜ヶ崎ではいま毎日誰かが死んでいるような状況であり、あらためて「死」にむきあうことを考えたいと思う。わたしたちは「むすび」に関わったことをきっかけにし、誰もが死にゆく当たり前のことを前にして、そこから多くのことを学んでいる。

つぎに釜ヶ崎で急増した生活保護について考えたい。生活保護になって畳のうえにあがりました、となつて、それ

で人生がバラ色になるわけではない。「むすび」のように、多くの人たちと関わりあいながら自ら社会参加の機会と仲間たちとの居場所を運営しているケースは稀であり、多くはお酒やギャンブルなどに孤独をまぎらわせている。

貧困ビジネスがきわどいのは、単身者の孤独や孤立を逆手にとり、それを埋めてあげるかわりに、時間やお金を吸い取る。ギャンブルやお酒、生活のベースである住居そのものが、その対象となる。しかしながら、それらがすべて貧困ビジネスかどうかと判断するのは大変難しい。ともかく雨露をしのぐ部屋や独居のさみしさを埋めてくれる何かを民間で行なうならば、そこに対価を求めるのも当たり前であろう。それらを国や自治体が面倒をみるとなると、建物も足りないし、さみしさにつきあう人、生き甲斐づくりを生み出す人の人件費、事業費など、圧倒的に無理がある。莫大な税金がそこに投与されなければ実施できない。この不況下においては民間を活用せずに困難な状況は改善しない。例えば、釜ヶ崎ではドヤ転用型の福祉マンションが多く、三畳一間の部屋が家賃四二〇〇〇円である。二四時間いつでも入居者の問題に対応できるようスタッフを設置したり、入居者の生き甲斐づくりをつくろうと活動するマンションもあれば、入居者から共益費や〇〇費という名目を取りながら貧困ビジネスを行なう福祉マンションも存在する。同じような高いや事業、活動をおこなないながら、釜ヶ崎に暮らす人と誠実

な関係をむすんでいる人々もいる。そして、それは表面的に見てもわからないし、時間を要する作業であることを付記しておく。

さらに、釜ヶ崎の端の動物園前商店街にふたつの拠点をもつコルムでの事例を紹介しながら、「まちにおけるつながりづくりと表現の可能性」をさぐりたい。

野宿の経験をもつ六〇歳代の男性Aさんは生活保護を受給し、すこしづつ落ち着きを取り戻しているが、それまでの数十年は釜ヶ崎のあちこちで喧嘩し、包丁をもって歩いているという危険人物であった。現在住まう部屋は三畳でユニットバスもついているが、集めた物で足の踏み場もない。感情的になると自制がきかず、知的障がいの手帳を持つているとか持っていないとか。コルムにはもう三年ほど毎日六回前後通っている。最初は会話も成立しなかったが、なじみの人ができたり、彼の壮大な鉄道物語を聞いてくれるお客さんたちがいて、すこしづつ変化が現れてきた。それまで彼の表現といえは、好きな鉄道グッズや映像資料を集めることだったが、コルムで絵を描いたり習字を書いたりする機会にふれ、最初は断固として表現することを嫌ったが、あるときから絵を描きはじめ(あまりにユニークで、その絵をみるとふっと笑みがこぼれる)、「どんな字かな」と聞きながら、みじかい文章を書くようになった。

彼は数字が苦手なようで、月初に受給されたお金を半月ほどで使い切ってしまう。一週間に使うお金、一日に使うお金をいっしょに計算して紙に書いておいてもくしゃくしゃにしてしまう。スタッフやお客さんはお金をせびられたり、貸してと言われることもたびたびだったが、断るようにはしていた。そこで、「おかずチケット」(喫茶店のコーヒーチケットのおかず版を特別に作成し、お金のあるときに購入してもらうことも試した。しかし一〇枚綴りを一セットしか買わないので、一ヶ月もたない。先日は「米を貸してくれ」とやってきた。店にはお米があり貸すことは簡単だが、考えてみようと思ひ、二時間後にもう一度来て、と帰した。

Aさんがコルムに来てくれて嬉しいし、Aさんも近所のこの店に親しみをおぼえてくれていることだろう。けれど毎月、お金がなくなると、イライラしてやってきて「気がたつとるんじゃ」と言われてばかりではこちらもちまらない。喧嘩をしているAさんをとめにはいったスタッフに暴力をふるったこともある。

先日、西成市民館のスタッフと道で立ち話をしたことをふっと思い出した。困窮した人にお米を現物支給したんだけど、そういうった制度をどうのこうの、とおぼろげな内容だった。さっそく西成市民館に連絡してみた。電話にてでくださった方がいねいに社協の制度でお米を支給できますよと教えてくれた。生活保護受給者でも困窮し

ているという状況であれば即日支給も可能とのことなので、Aさんも助かることだろう。二時間ほどしてAさんが来た。「今から西成市民館に行つて、事情を話してみても伝える。それから一時間もたないうちに、Aさんが落ちついた様子で「ありがとう」とやつてきた。

こうして、Aさんは話を聞いてくれる相談員と時間をすごし、困窮してもちゃんと誰かに説明して何とかなること(もちろん、ていねいにお金とつきあえるようになるのが一番よい)を経験した。生活範囲のなかで自分を認めてくれる存在や場がいくつもあるということが、住みやすさであり、地域の力といえよう。

こうした地域の力を発揮するためには、いくつかの要素が必要であると考ええる。つなぐ場、つなぐ人、関心を寄せる人、呼びかける人、こたえる人、聴く人、語る人、伝える人。仕組み。けれど仕組みは硬直化も生み出すし、仕組みから洩れる存在や問題もつねにある。そこに気づき、アクションを起こすことも大事だ。新しい人の存在も必要だろう。新しい関係性をつくり、世代交代していくためにも。

多様な人々がいると物事はスムーズにはすすまない。けれど、社会というのは多様な人々で構成されているのだから、むしろ多様な人々が関わり合つて生きていることが豊かだと思ふ。

ヨルムは釜ヶ崎では新しい存在で、年齢も若く、アトという、よくわからない分野のNPO法人であり、カフェとメディアセンターという釜ヶ崎にはこれまでなかったタイプの場を持っている。ふたつの場は一般的なカフェやメディアセンターのしつらえとは異なり、畳にちやぶ台が置いてあり、雑然とおしゃれではなく貧乏くさい。いいうに言えば昭和のにおいのする小さな空間であり、市場経済主義とはすこし異なる雰囲気で開いている。変化する釜ヶ崎のなかで人々に出会つて、考え込み、アクションへつなげていこうとしている。

こうした場ではこれまで釜ヶ崎で働き活動していた人たち同士も出会いなおしたり、新しい人たちが地元の人たちに出会つていく。即興で起こるさまざまな出来事こそが、やがてそれぞれの人生に種をまいていくのだと信じていた。

本事業で実施されたこどもの施設や福祉マンションへのアウトリーチなども、ここで根ざしながら活動できたからこそ実現できたものである。またそれらを表現し、社会へ発信していくことに関わつてくれた方々やそれを受け止めてくれた関係各位に感謝を述べるとともに、地域のなかで学びながら、今後も活動をつづけていきたい。

論考 二

コレクティブタウン釜ヶ崎・・

「縁をつむぎ居場所」でつながるまちづくり

寺川政司

「釜」がぬくもりはじめた

このまちには極めて多様なアクターがおり、多くの居場所が社会関係資源として存在している。今、これらの資源を素材とする「釜」がふつふつと煮えてきた。これまで個別に存在していた素材は、「釜」が温まると同時に相互に影響しながら味に深みが増しつつある。

萩之茶屋地区は、釜ヶ崎やあいりんと呼ばれ、極めて困難な社会的課題を抱える地域として、負のイメージで語られることが多い。特に最近では、「貧困ビジネス」や「無縁社会」の代名詞にもなっている。一方、町会住民と労働者の人口比率が一对九の状態（私はマインリティの逆転現象と呼んでいる）において、地域の各種関連組織間では「違い」が強調されることにな

かなか連携できず、幾度となく関係性の構築と失望を繰り返すなかで、「疑心暗鬼」と「あきらめ」が重石となつてのしかかつていた。

しかし、表面的には何も解決していないように見えたとしても、各々の活動は日々確実に進化しており、特に幅広く多様な「場」づくりの活動は、地域や住民にとつてかけがえのない「居場所」として醸成されてきているように思う。

何かが起ころうとしている今、課題分析や問題提起については、他の研究者等に委ね、本稿では、このまちが独自に持っている「もうひとつの「縁」」について述べながら、むしろとことん前向きに価値を転換する、このまちと人の関係性を紡ぎ合わせる「コレクティブタウン」としての可能性について述べたい。

「コレクティブタウン」という考え方

はじめに、「コレクティブタウン」というキーワードについて、現時点では一般化していないが（筆者も整理中の造語）（注1）、ここでは、『地域コミュニティで相互の安否確認や生活支援等による安心が担保され、かつ世代を問わず多様な協同の居場所（機会）が確保された、地域が住まいの続きのような機能を満たす協同居住のまち』と定義しておく。

この概念は、そもそも北欧で実践されてきた「コレクティブハウジング」から派生しているが、その定義は、『個人や家族の自由でプライベートのある生活を基本に、複数の世帯が日常生活の一部を共同化して生活の合理化を図り、共用の生活空間を充実させ、そのような住コミュニティを居住者自身がつくり育てていく住まい方』とされている(注2)。

この二つの違いを簡単にいえば、「コレクティブハウジング」が建物にコミュニティ(まち的要素)を組み込んでいる事に対して(注3)、「コレクティブタウン」は、まち(コミュニティ)を住まいの一部として捉えている(まちの資源を利用する)点にある。こう考えると、前者については北欧で生まれたと紹介したが、「コレクティブタウン」は、元来日本のまちやコミュニティがもっている(もっていた)自然な姿でもあるといえる。具体的には、長屋(借家)、井戸端会議、相互扶助、講、銭湯、めしや、御用聞き、屋台等々、いわば、住まいとまちの間に所有から共用(利用)の概念を再構築し、地域の資源を生かして、緩やかにつながる選択可能な出会いの機会と居場所+複層的な地域関係資源ネットワークが確保できているまちの姿が浮かび上がってくる。

実はこれは私にとって、各地のまちづくりのプロセスのなかで生まれてきた重要な概念なのだが、現在の

釜ヶ崎は、ある面ではこの概念を究極に具現したまちではないかと感じている。

選択可能な「居場所」ともいえる「縁」

ちょうど一年前、『無縁社会』と題した番組がNHKで放送され、世間に大きなインパクトを与えた。「身元不明の自殺と見られる死者」や「行旅死亡人」など統計的にカテゴライズされない『新たな死』を取り上げ、「地縁」「血縁」といった地域や家族・親類との絆を失ったのに加え、終身雇用の崩壊によって「社縁」までが失われたことよって生み出されたものであり、地域コミュニティの崩壊と関係性の希薄化によって生まれている点において、どこでも、誰にでも起こりうる大きな社会問題として取り扱われている。

特に「行旅死亡人」については、このまちで無視できない深刻なテーマでもある。しかしながら、この本で報告されている『むすび』のメンバーの死が「身元不明者」として扱われようとしていた際に、新たに紡がれた「縁」によって取り戻されて多くの友人に看取られたことや、たまたま地域のリーダーが「身元不明者」の確認の際に日ごろの顔見知りであることが分かり、親族に正確な情報を伝えることで遺体が引き取られることになった事例などに触れると、「もう一步」踏

複層的な地域関係資源ネットワークの萌芽

み込んで間をつなぐ媒体が極めて重要だと感じる。実は、行政システム上の「身元不明」によって生まれる「無縁」は、新たに紡がれている「縁」によって相当回避される状態にあるのではないだろうか。

思い返すと、このまちには他にはみられないほど多様かつ頻繁に「縁」が存在していることに気づく。労働センター等の施設はもとより、コルルームのような新たなつながりの居場所をはじめ、街角や公園などの共有（公共）空間にいたるまで、ハレとケ、善し悪しも含めて、まちのいたる所で出会いが生まれ、ある意味で濃密なコミュニケーションがとられている。ただ、それは瞬間的に表れる「縁」でもあることから見えにくい（筆者は『刹那縁』と呼んでいる）。しかし、様々な問題を抱え、極めて匿名性の高い個人が「つながり」を求めるとするならば、その一瞬はかけがえのないものとなる。ただ、この「縁」が生まれるためには、出会うのが数多く必要であり、選択可能であることが重要であるが、誰が計画したわけでもなく必然的に存在している点に注目したい。いわば、このまちは「孤独（主観的）」を受け止めながらも「孤立（客観的）」しない新たなつながりと共用空間として充実した居場所を持つコミュニティを特徴とするコレクティブタウンの要素を持っているともいえる。

コレクティブタウンを成立させるもう一つの要素として、「複層的な地域関係資源ネットワーク」をあげたが、この点に関しても大きな動きがみられる。それは、町会と支援団体との協働プラットフォームの構築である。これまでも行政・支援組織・町会等が解決を目指してきたが、想いの違い等から相互不信感もあり、デリケートな関係の中で連携困難な時期が続いた。二〇〇四年には町会を中心とするまちづくり協議会である「萩之茶屋小学校・今宮中学校周辺まちづくり研究会」が設立され、子どもや環境をテーマとした活動を展開してきた。一方で、労働者や支援組織との繋がりが不可避であることから、二〇〇七年に、あくまで仮の組織として位置づけた、緩やかに寄り合える、共床共夢、（注4）の場として、「（仮称）萩之茶屋まちづくり拡大会議」が設置された。二〇〇八年に小学校横の屋台火災が起こり、市は屋台撤去の方針を出して環境改善プロジェクトチームを結成した。拡大会議では、共有できる具体的な活動で協働して市に提案することで一致し、地域の将来像を示すまちづくり構想づくりがはじまった。この活動は、地域の歴史で初めて訪れた連携の好機として意識し、あまりに問題が深刻な為にあきらめかけていたまちづくりの再構築の契機として捉えている関

係者も多い。この活動を振り返って感じることは、各主体間において「お互いに知っているようで知らない」ことへの気づきと、「違い」を感じながらも「想像力」をもって議論することにつながり、共生する関係構築の重要性であろう。

現在、この研究会ではまちづくり構想案(5)が出されている。また案の段階であり、地域の意見をどんどん取り込んでいく必要があるが、その検討するための想いが形になってきたことは特筆できよう。

わが国のまちづくりは、ややもするとカリスマリダーの意向や行政による手続的なアリのバイづくりの住民参加に陥る場合がある。このまちでは、あまりに多くのリーダーが存在していたことから、逆に相互に距離感を保ちながら共通課題に対処するきっかけが生まれつつあり、対立と排除の関係を越えたボトムアップ型まちづくりの可能性が高まっている。この機会に対する関係者の期待度も高く、複層的な地域関係資源のネットワーク化が図られつつあるといえる。

釜ヶ崎のまちづくりの現代的意義

本稿では、釜ヶ崎というまちが、複層的な地域関係資源のネットワークが構築されつつあるなかで「縁」をつむぎ「居場所」でつながる「コレクティブタウン」

という特徴を持っている可能性について述べた。私は、これを「特殊解」としてではなく、現代日本が抱える社会問題にとつて貴重な知見を含んでいると捉えている。特に、「高齢化・単身化」の進展に関して、もはや解消すべき問題や課題ではなく実態として捉えるならば、今後地域・デビューする団塊の世代をはじめ、地域コミュニティの存在や役割が重視されていくことは容易に推測される。

経済学者の広井良典は、コミュニティについて論じた著書の中で、農村的な関係性を都市に持ち込むことで成功してきた戦後の日本社会においては、集団を一步離れると何のつながりや救い手もないような関係性のあり方が人々の孤立や不安を深め、生きづらさの源になっているとし、現在は「一個人が独立しつつつながる」都市的な関係性構築という矛盾のプロセスにあるとしている。そして、コミュニティとは“重層社会における中間集団”として、集団の内部的な関係性(農村的)と外部との関係性(都市的)を相互補完的に持つ点に核心があるとしている。また、J・ジェイコブスは、コミュニティは定住者と一時的な居住者とを融合させることで社会的に安定する、そして長期間その場所にとどまる人が継続性を提供する一方で、新参者はクリエイティブな融合を生み出す多様性と相互作用を提供するとしている。これらは、新たなつながりの

論理とまちづくりの主体や役割について述べたものであるが、釜ヶ崎では空間的にも多様な活動においてもすでに実現しているように思う。いわば、チャレンジのプロセスを通じて、現在のわが国で社会システムとして準備されていない仕組みづくりをしているといっても過言ではない。

最後に、様々なまちに関わりながら、私自身が各地で共有しうるテーマとして注目しているキーワードを示して本稿を終えたい。それは、「安心して死を迎えることができるか」ということである。最近では、「終活」という言葉がメディアで流されるようにもなったが、まちづくりにおける究極のテーマが「コミュニティベースド・ターミナルケア」であり、それを具現するための「セーフティネット」の構築ではないかと感じている。

このまちにはアクターが揃っており、舞台も整っている。同じ釜の飯を食べながらトライアルアンドエラーのプロセスで培った経験を持つ仲間がつながりだすことで、前人未到のまちづくりは新たなフェーズに入ったように思う。究極のテーマの実現に期待したい。

注

(1) 現在この概念の定義に関しては、『一人ひとりの高齢者の安心・自立居住が可能となるような「居住一福祉」まち一体型住環

境』(乾、二〇〇二)や『コミュニティ・まちに関わる人々が、ゆるやかな共同生活のような人間関係や空間の中でまちを感じ、さえながら成長していくまち』(内田、二〇一〇)などがある

(2) ハード面については、それぞれが独立した専有住戸と豊かな共用空間と設備を持ち、ソフト面では、生活の一部を共同化し、夕食等の共同運営を特徴としている

(3) 日本では、東京の日暮里にある民間型多世代コレクティブハウジング『かんかん森』が、公営住宅としては、阪神淡路大震災後に災害復興住宅において、孤独死の問題を解消する手法として導入され(二〇事業、三〇〇戸建設、現在多様化しつつある新たな住まいとして注目されている。

(4) 多様な組織や考え方がある中で、共有の場づくりを図ることをイメージした「同床異夢」に対する造語として使っている。

(5) まちづくり研究会が構想案として提案している。三つの理念と六つの活動テーマが示されている。(三つの理念:子ども声が聞こえるまちづくり/いざという時にこそ強い安全安心のまちづくり/マイナスイメージをプラスに活かすまちづくり)

そして、日々はづぶく

雪のちらつく二月のある日。コールドにはいつもの顔なじみさんや通りすがりの外国人、入ってくるなり「風呂行ってくるわ」と言うものの、なかなか風呂に行かないおじさんや着付けの練習に来たお姉さん、新世界のイベントを手伝いにいく学生さんと、いろんな人たちが出たり入ったりしている。スタッフたちは年度末の仕事に少しおおい顔で、助成金の選外通知をみて「あちゃー」と嘆いていたりする。「はい、きんかん茶」カウンターからだされるカップを受け取る手。『参加型カフェ／コールドのすごしかた』を読んで「ほんとに皿洗いしていいですか」と聞いてくれるはじめてのお客さん。「はい、ありがとう。洗ってください。洗ったらカゴに入れとってください」とパソコンの手をとめないスタッフ。どやどやわちゃわちゃ。どつかんどつかん、あー忘れてた。ちよつと行ってくる。なに、困ってるの。ありがとう、助かるわ。また、あしたね。

劇場のようなコールド。カフェもカマン！メディアセンターもいつも即興劇か、ワークシヨップのような状態である。日々が編まれている。昨夜はどこかで飲んで帰れなくなったIさんが「泊めてくれ」とやってきくる。残っていたスタッフ

フは彼が日雇いだからお金もないこともわかっているが、でも一度泊めたら次どうなるのか、Iさんの手にしたワンカップをまだ飲もうとする姿をみて今回は断る決断をする。瞬間の判断を重ねながら、ほんとにこれでいいのか揺れる。たぶん人はこういう揺れのなかを生きている。まちがおもしろいのは揺れが重なり合うからだ。

釜ヶ崎の揺れは、世間のふつうのまちと少し異なるかもしれない。過去を語らず孤独を生きる人たちのまちは、ざらざらとした手触りで、ことばを失うようなことも多い。このまちは何十年もざらついてきただけあって、人々は工夫に長けている。そして、なにもかも、いろいろあつた一日を包むようにまちは夕暮れていく。

本事業で実施されたこどもの施設や福祉マンシヨンへのアウトリーチ、五人の方への聴き取りなども、当法人がここで根ざしながら活動できたからこそ実現できたものである。カフェとメディアセンターというささやかな居場所があることで、日々の関係が生まれる。関係をささえるのは、こまやかなやりとりと、それらを表現しあい、味わう時間をもつことにある。こうして、社会へ発信していくことに関わってくれた方々やそれを受け止めてくれた関係各位に感謝を述べるとともに、地域のなかで学びながら、今後も活動をつづけていきたい。

(上田假奈代)